宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 139 集

分　蔵　遺　跡

Bunzou　Site

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

２００６

宮崎県埋蔵文化財センター

分蔵遺跡遠景（西から）

分蔵遺跡出土遺物

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より皆様方の深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、平成 17 年度から東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本書はその 1 冊目の発掘調査報告書となります。

本書に掲載した分蔵遺跡は、縄文時代後期から晩期にかけての遺物包含層が確認されています。完形に復元された天城式の深鉢形土器を中心とする縄文時代後期末、黒川式土器を主体とした晩期中葉の土器などが出土しており、県内での該期の土器を考える上での貴重な資料となりました。さらに多様な石器も出土しており、縄文時代の生活のあり方を知る重要な情報を得ることができました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 18 年 11 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長　　清　野　　勉

例　言

1. 本書は、平成 17 年度に実施した、東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う分蔵遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。

3. 発掘調査は平成 17 年 9 月 29 日から平成 17 年 11 月 4 日まで行った。

4. 現地での実測、写真撮影等記録は、渕ノ上隆介、岡田諭が行った。

5. 空中写真撮影については、（株）九州航空に、基準点設置については（株）新産測量設計コンサルタントに委託した。

6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース等は渕ノ上が当センター調査員石津晴菜の協力を得て行った。

7. 本書で使用した遺物写真は渕ノ上が撮影した。

8. 本書で使用した第 1 図　周辺遺跡分布図は国土地理院発行の 1 /50,000 図を利用した。

9. 土層断面及び土器の色調等は『新版標準土色帖』に拠った。

10. 本書で用いた標高は海抜絶対高であり、方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。座標は国土座標第Ⅱ系による。

11. 本書の調査区平・断面図及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。　石器類 S= 1 / 2、土器類 S= 1 / 3

12. 本書の執筆・編集は渕ノ上が担当した。

13. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査・整理の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第２節　先行調査とその成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

出土遺物

第３節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第４節　整理作業及び報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第Ⅳ章　調査成果

第１節　Ｂ区　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

層位と遺構／遺物出土状況／出土遺物

第２節　Ｃ区　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

層位と遺構／出土遺物

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　分蔵遺跡出土土器の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第２節　調査のまとめ―分蔵遺跡の評価―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

挿図目次

第１図　分蔵遺跡周辺遺跡分布図・・・・ 4

第２図　分蔵遺跡周辺地形図・・・・・・ 6

第３図　先行調査出土遺物・・・・・・・ 7

第４図　Ｂ区平面図　・・・・・・・・・ 9

第５図　Ｂ区東壁土層断面図　・・・・・ 10

第６図　Ⅵ層出土土器・・・・・・・・・ 11

第７図　Ⅵ層出土土器・・・・・・・・・ 12

第８図　Ⅵ層出土土器・・・・・・・・・ 13

第９図　Ⅵ層出土土器・・・・・・・・・ 14

第10図　Ⅳ層・Ⅲ層・Ⅱ層出土土器・・ 16

第11図　Ｂ区出土石器・・・・・・・・・ 17

第12図　Ｃ区平面図・・・・・・・・・・ 19

第13図　Ｃ区出土遺物・・・・・・・・・ 19

第14図　Ｃ区西壁土層断面図・・・・・ 20

表目次

第１表　土器観察表・・・・・・・・・・・・ 24
第２表　土器観察表・・・・・・・・・・・・ 25
第３表　石器計測表・・・・・・・・・・・・ 25

図版目次

巻頭図版１　分蔵遺跡遠景（西から）
巻頭図版２　分蔵遺跡出土遺物
図版１　分蔵遺跡遠景（東から）、分蔵遺跡調査区俯瞰・・・・・・・・・・・・・ 27
図版２　Ｂ区俯瞰、Ｂ区東壁土層断面 ・・ 28
図版３　Ｃ区俯瞰、Ｃ区西壁土層断面 ・・ 29
図版４　Ⅵ層出土深鉢形土器、深鉢形土器内面・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
図版５　Ⅵ層出土浅鉢形土器、Ⅵ層出土土器、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層出土土器、Ｂ区出土底部、出土土器、Ｃ区出土土器・・・・・ 31

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間については平成元年に基本計画区間に決定された。本遺跡が所在する門川～日向間の約 14㎞については、県文化課が平成 15 年８月に日本道路公団から遺跡の分布調査依頼を受け、翌 16 年３月、７遺跡 174,000㎡の埋蔵文化財包蔵地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する同公団延岡工事事務所が開設された同年 11 月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成 17 年２～３月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と県文化課との間でなされ、これにより発掘調査対象面積が当初の 174,000㎡から 91,400㎡に縮減された。

限定協議の結果、分蔵遺跡では当初面積 5,800㎡のうち、橋脚間の面積を除いた計 900㎡が調査対象となった。

第２節　調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体　　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

[平成 17 年度]

所　長

宮園　淳一

副所長兼調査第二課長

岩永　哲夫

総務課長

宮越　尊

主幹兼総務係長

石川　恵史

調査第一課長

髙山　富雄

調査第一課主幹兼調査第一係長

長津　宗重

調査第一課主幹兼調査第二係長

菅付　和樹

（調査担当）

調査第一課調査第二係主事

渕ノ上　隆介

岡田　諭

（整理・報告書担当）

調査第一課調査第二係主事

渕ノ上　隆介

調査第一課調査第一係整理専門員

金丸　琴路

[平成 18 年度]

所　長

清野　勉

副所長

加藤　悟郎

副所長兼調査第二課長

岩永　哲夫

総務課長

宮越　尊

主幹兼総務担当リーダー

髙山　正信

調査第一課長

髙山　富雄

調査第一課主幹兼調査第二担当リーダー

菅付　和樹

（整理・報告書担当）

調査第一課調査第二担当主事

渕ノ上　隆介

（発掘作業員）

岩切敏子、岩井イツ子、柳田一枝、岩井キミヨ、松澤敏澄、三浦京子、池田妙子、野地峯雄、黒木靖男、小野孝行、志田和善、和泉満子、池田

洋子、長友サヨ子、川原壽子、吉田三代子、加藤幸子、永倉佐也子、金丸幸義、濱田英明（順不同）

（整理作業員）
佐藤鈴子、日高香屋子、稲元光恵、寺原由美子（順不同）

　なお、門川町教育委員会の窪田麗子氏には、調査の準備段階からお世話になり、調査についても御教示いただいた。また分蔵遺跡が所在する小園地区区長の中城久幸氏には、発掘作業員の雇用説明会開催にあたって、募集の回覧や会場準備等で御協力いただいた。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

分蔵遺跡は、東臼杵郡門川町大字門川尾末字分蔵に位置する（第１図）。門川町は、宮崎県の北部に位置し、北を延岡市、南を日向市、西を美郷町と接しており、東は日向灘に面している。面積の約８割は山地であり、町内の中央を東西に貫流する五十鈴川（いすずがわ）は、美郷町の真弓岳を源流とする河川で、その下流域には平野が広がる。

遺跡は、平野部と山間部の境界域にあたる五十鈴川下流域の南側河畔に位置する。河川は大きく蛇行しており、標高が約８ｍと低いため、台風などに伴う増水によって冠水することもある。現在は宅地として利用されており、10 軒程度の小規模な集落が形成されている。

第２節　歴史的環境

門川町域では、西部山間部の三ヶ瀬地域において旧石器時代の剥片石器や礫器などが採集されているが、調査例はなく、詳細は不明である。

門川町に遺跡が展開し始めるのが、縄文時代後期である。五十鈴川河口付近に位置する門川南町遺跡（33）では、後期前葉から中葉を主体とする土器と住居跡が検出されている（山田編 1996）。福田ＫⅡ式や彦崎 K1 式系・小池原上層式などの瀬戸内系の土器や指宿式・市来式といった南九州系の土器が出土しており、日向灘を利用した活発な交渉の跡が窺える。また晩期の土器としては、包含層中より黒川式や無刻目突帯文土器が出土している。

五十鈴川上流に所在する赤木遺跡では、縄文時代後期の住居跡・土壙などが検出されている（窪田 2000）。三万田式土器が出土していることから、分蔵遺跡よりやや古い段階の集落跡であったと考えられる。門川町域では縄文時代後期から晩期を中心とした遺跡が多く認められることが特徴的である。

その一方で、弥生時代になると散布地で遺物が採集されているのみで、該期の遺跡が極めて希薄である。続く古墳時代には、中山古墳（17）やアゼ地古墳（26）、其田古墳（27）などの古墳も多く認められるが、いずれも未調査であり、実態は不明である。

また、分蔵遺跡周辺には、門川城跡（20）をはじめとして江田城跡（３）、佐々宇津城跡（５）、松尾城跡（６）、新城跡（31）など城跡を中心として中世の遺跡が多く認められる。

【参考文献】

窪田麗子 1994『門川町遺跡詳細分布調査報告書』門川町文化財調査報告書第２集　宮崎県門川町教育委員会

窪田麗子 1999『赤木遺跡発掘調査概報』宮崎県営中山間総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査　宮崎県門川町教育委員会

窪田麗子 2000『赤木遺跡発掘調査報告書』宮崎県営中山間総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査　宮崎県門川町教育委員会

山田洋一郎編 1996『門川南町遺跡』一般国道 10 号門川拡幅南町地区事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　宮崎県教育委員会

1．分蔵遺跡（縄文）
2．長峰遺跡（近世：散布地）
3．江田城跡（中世：城跡）
4．迫ノ前遺跡（弥生・古墳・近世：散布地）
5．佐々宇津城跡（中世：城跡）
6．松尾城跡（中世：城跡）
7．迫ノ前第２遺跡（近世：散布地）
8．加草遺跡（散布地）
9．丸山遺跡（古墳）
10．竹名遺跡（中世：城跡）
11．竹名石塔群（近世：石塔群）
12．森ノ前遺跡（近世：散布地）
13．宮ヶ原遺跡（散布地）
14．宮田遺跡（古墳：散布地）
15．城山遺跡（中世：城跡）
16．深坪遺跡（古墳：散布地）
17．中山古墳
18．福寿寺跡（中世：寺院）
19．平田遺跡（散布地）
20．門川城跡（中世：城跡）
21．落郷遺跡（古墳：散布地）
22．城屋敷遺跡（古墳：散布地）
23．花畑遺跡（古墳：散布地）
24．土橋遺跡（縄文：散布地）
25．門川町古墳第 06 号墳
26．アゼ地古墳
27．其田古墳
28．コモ田遺跡（古墳：散布地）
29．門川町古墳第 01 号墳
30．門川町古墳第 04 ～ 05 号墳
31．新城跡（中世：城跡）
32．古川関所跡（近世：関所跡）
33．南町遺跡（縄文・弥生・古墳：散布地）
34．中屋敷遺跡（弥生・古墳・古代・中世：散布地・寺跡）

第１図　分蔵遺跡周辺遺跡分布図（S ＝ 1/25，000）

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査・整理の経過

分蔵遺跡では本調査に先立ち、平成 17 年８月８日から 11 日にかけて遺物・遺構の分布密度を確認し、現状保存を図る際の判断資料を得るための調査（以下、先行調査とする）を行った（第２図）。

調査対象は橋脚３基の計 900㎡であるが、橋脚工事に伴う工事用道路部分も合わせて、埋蔵文化財への影響を把握するためにトレンチ調査を行った。

調査の結果、いずれのトレンチでも遺構は確認できなかったものの、縄文後期から晩期にかけて土器や石器類が出土し、良好な遺物包含層が残存していると判断された。遺物の認められない北側橋脚部分については今回の調査対象から除外することとなった。また工事用道路部分については遺物包含層が約１～ 1.5m 下と深く、埋蔵文化財への影響はないと判断し、調査対象から除外した。

以上の結果に基づいて、平成 17 年９月 29 日から 10 月 28 日までの予定で先行調査面積を除く 534㎡について本調査を実施することとなった。宅地の造成土を重機によって剥ぎ取り、手掘りによる掘削を行ったが、造成の影響を受けたためか包含層が非常に固く、掘削に時間を要した。また、10 月４日には、約１時間程度の集中的な豪雨に見舞われ、調査区が冠水するアクシデントにも見舞われた。

10 月 20 日には、門川町郷土史講座の受講生が来跡し、遺跡の調査概要について説明を求められた。

作業員の雇用も終了し、調査員のみで実測作業を行っていた調査最終日に、最終確認のため一部を掘り下げたところ、土器の良好な一括資料が検出された。周辺に遺物が集中している可能性があったため、調査期間を同年 11 月４日まで延長することとなった。

周辺を確認するために、調査区東半分についてさらに掘り下げを行ったが遺物の集中は見られず、石器や土器片が散在して出土し、それらの取り上げを行い、調査を終了した。

なお、整理作業は平成 18 年１月から行い、同年８月に終了した。

第２節　先行調査とその成果

先行調査は、平成 17 年８月８日から 11 日まで行った。調査対象となったのは、橋脚３基の計 900㎡と工事用道路部分である。調査では、橋脚建設予定地を北から順に A・B・C 区と呼称し、各調査区で遺構・遺物の残存状況を確認するための重機掘削を中心としたトレンチ調査をおこなった。

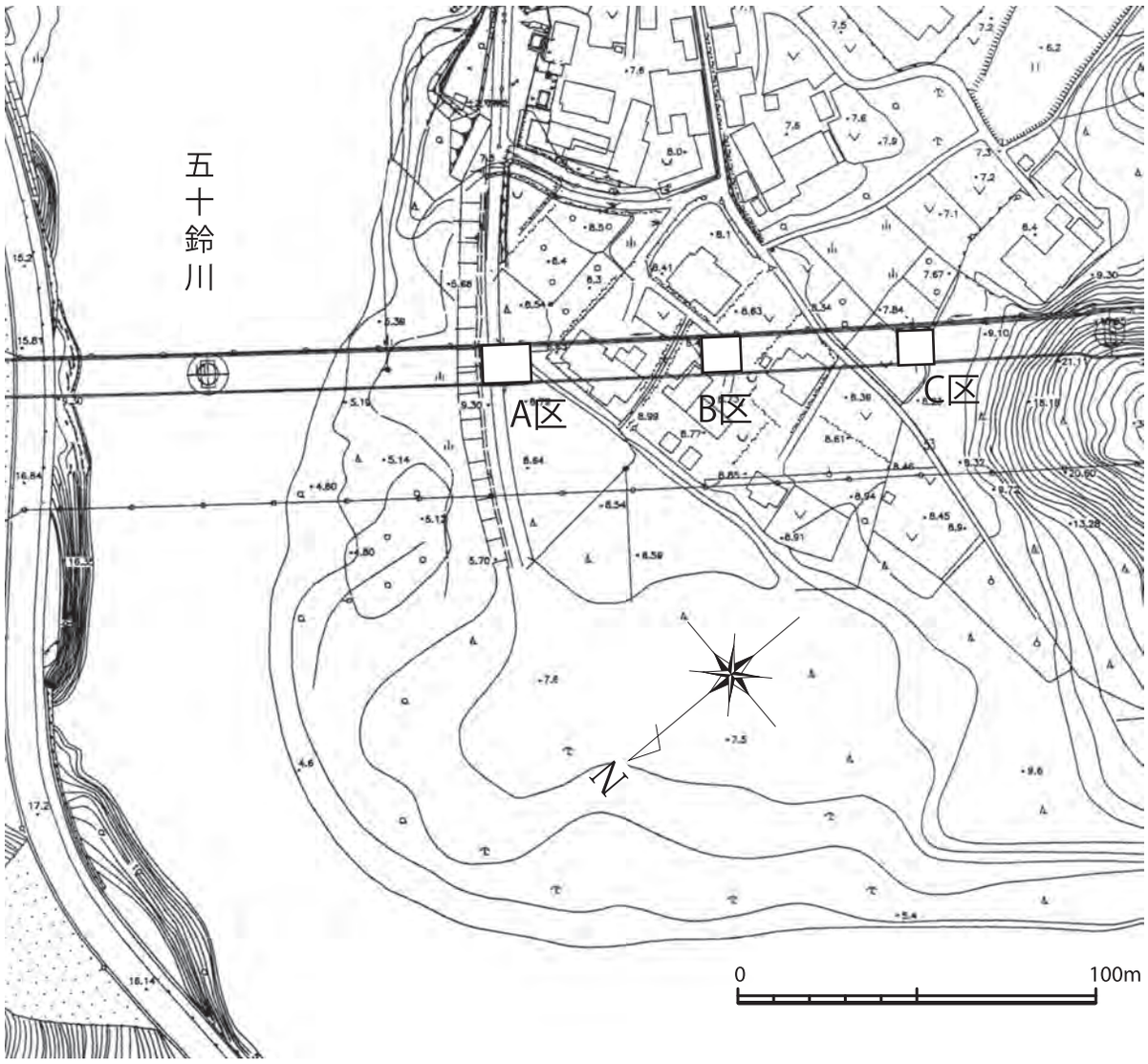
A 区は以前利用されていたため池を埋め立てた箇所で、調査の結果埋め立て土及びため池の埋土と考えられる青灰色土が検出され、遺物は確認できなかった。

B 区は、橋脚部分に T 字状に調査区を設定して掘り下げを行ったところ、砂礫層下より表面の風化が著しいものの土器片数点と石錘が出土した。砂礫層は拳大の円礫を多く含み、五十鈴川の影響で堆積したものと思われる。B 区では砂礫層下に遺物包含層が良好な状態で残っていることが判明した。

C 区でも同様に砂礫層下より土器片数点を確認した。B 区に比べて円礫はやや小さくなっているものの、同様の堆積状況を示している。

また、工事用道路部分については、B 区及び A 区を繋ぐ部分にトレンチを設定して調査を行ったところ、B 区・C 区と同様に砂礫層と砂質土層を検出した。また、トレンチ中央に自然流路と思われる溝状遺構があり、黒色磨研土器などの土器片や敲石、石錘などが出土した。

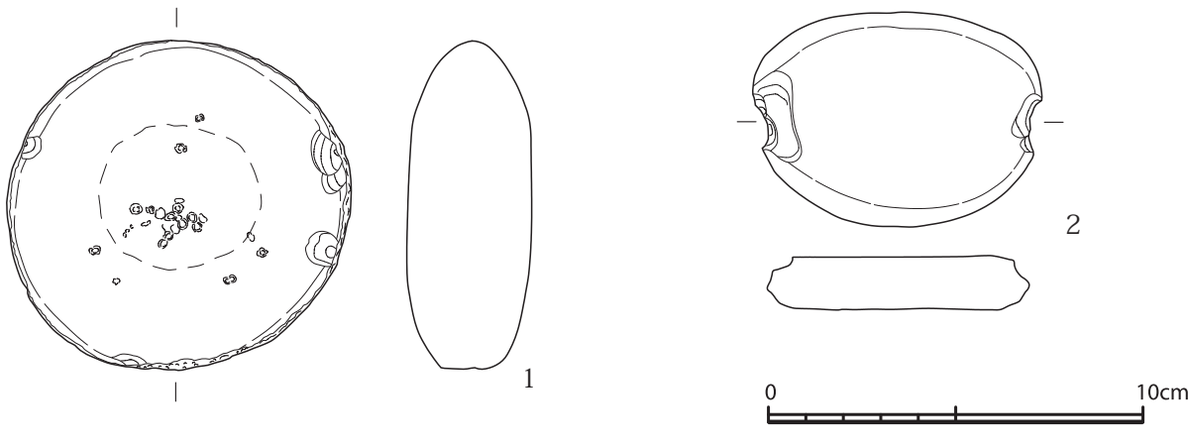
出土遺物　　出土遺物のうち、土器については表面の摩耗が激しく調整等不明のものが多いた



第２図　分蔵遺跡周辺地形図（S ＝ 1/2,000）

調査日誌抄

8.8　先行調査の開始。調査範囲の確認と環境整備を行う。
8.9　橋脚部分及び工事用道路部分についてトレンチ調査を開始。中央橋脚部において土器片および石錘を検出。
8.10　所長、調査第一課長が視察。
8.11　工事用道路部分についてトレンチ調査。工事用道路部分において黒色磨研土器や敲石などが出土。
9.1　発掘作業員雇用説明会の開催に向けて、小園地区区長と打ち合わせ。開始日時を調整し、募集の回覧を依頼。
9.7　門川町教育委員会担当者に本調査開始の通知と協力依頼。
9.13　雇用説明会。
9.21　追加雇用説明会。
9.29　調査開始。重機による表土および造成土の掘削。
10.4　午後から強烈な雨が降り、調査区が一気に水没。急遽排水ポンプを借りるなど対策を練る。
10.5　作業員による掘り下げ開始。底部片を中心として黒川式・無刻目突帯文と思われる土器が出土。
10.12　円礫を多く含むⅢ層を除去した後に、粘性の強い砂質土（Ⅳ層）を検出。
10.14　追加雇用説明会。
10.17　先行トレンチを設定し、現地表から 1.8m のところで地山と思われる粘質土を検出。
10.19　円礫を多く含む砂礫層（Ⅴ層）を検出。安全衛生パトロールによる指導。
10.20　午後より、門川町郷土史講座の受講生が訪れ現場説明を行う。
10.24　午後、空中写真撮影を行う。
10.25　所長、副所長、調査第一課長の視察。
10.26　調査区東側で浅鉢形土器などの口縁部がまとまった状態で出土。土層断面図実測。
10.28　最終確認のため一部を掘り下げた結果、深鉢形土器１個体がまとまった形で出土。周辺に遺物が広がる可能性が考えられたことから、期間延長を決定。
11.4　埋め戻しを完了し、調査終了。



第３図　先行調査出土遺物（S=1/2)

め、石器のみ図化した（第３図)。

敲石（１）は、8.8㎝× 9.2cm、厚さ 3.3cm の扁平な円礫を用いたもので、敲打痕が認められる。一部敲打痕の幅が狭くなる部分があり、その部分がやや赤色化している。石錘（２）は、扁平な砂岩製の楕円形円礫の短辺側を打ち欠いたものである。

先行調査の結果、近世を中心とした遺跡と考えられていた分蔵遺跡では縄文時代後期から晩期を中心とする遺物包含層が確認され、住居等の遺構は確認されなかったものの、工事掘削深度が深い橋脚建設予定地については本格的に態勢を整えた調査の必要があると判断された。

なお、工事用道路部分については、遺物包含層が現地表から約 1 ～ 1.5m 下と深く、上層が造成土により固くしまっていることから、遺物等文化財への影響はないと判断した。万全を期して工事にあたっては道路部分に盛土を施し、地中への影響を最小限におさえるように配慮していただいた。

第３節　発掘調査の方法

本格的に調査が必要となった B 区・C 区の計 534㎡について、９月 29 日から 11 月４日にかけて調査を行った。

いずれの調査区でも宅地造成に伴うと思われる造成土が約 1m 程度堆積しており、その部分については重機による掘削を行った。

下層については人力による調査を行ったが、非常に固くしまっていたことから調査が難航し、遺物も散在するような状態であったことから、調査区内にトレンチを３箇所設定し、先行して調査を行い遺構・遺物の状況を確認した。遺構は検出できなかったものの、まとまって遺物が集中する箇所が認められ、その部分については周辺を拡張して取り上げを行っている。

第４節　整理作業及び報告書作成

整理作業は平成 18 年 1 月から開始し、同年 8 月に終了している。完形に復原しうる一括資料については、土器の復原を行っている。

報告書作成にあたっては、本年度より当センターで取り組むデジタル入稿の方式をとった。使用 OS は Windows2000professional である。遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』を、一部 Adobe 社の Illustrator を使用し、eps 形式で保存、レイアウトを行った。編集・レイアウトについては Adobe 社の InDesign を用いた。入稿に際しては InDesign 形式での入稿を行い、印刷に際して PDFX-1a による出力を行った。

なお、写真については従来どおりフィルムで撮影を行い、版下による入稿を行った。

第Ⅳ章　調査成果

第１節　Ｂ区

層位と遺構　　東壁断面は 25 層に分層できたが、砂礫層の堆積状況に基づいてⅨ層に大別した（第４図、第５図）。

拳大の円礫を含む砂礫層と円礫の密度が薄い砂質土層とが互層状に堆積しており、その砂礫層の堆積状況によって区分された二つの遺物包含層が認められた。これらの砂礫層は、多くが円礫で構成されることなどから、河川の浸食・堆積作用によって形成されたものと考えられる。細分された土層断面から考慮しても砂礫層とした大別層位中でも小さな単位で砂礫層と砂質土層が堆積している状況が窺える。なお、炭を含む層位もⅥ層を中心として認められるが、周辺を精査するも遺構は確認できなかった。

遺物出土状況　　遺物取り上げ段階で、細別層位での取り上げは困難であったので、大別層位での取り上げを行っている。最も下の砂礫層であるⅧ層中からも石錘などの遺物が認められるが、その出土量はごくわずかで、包含層として認められるものはⅣ層及びⅥ層である。

Ⅵ層出土の遺物のうち、調査区の東壁側に集中した状態で、後述する完形に復原しうる深鉢形土器や浅鉢形土器、石錘などが出土し、それらの破片の残存状況も良好であった。遺構の存在が想定されたため、精査を行ったが、確認できなかった。浅鉢形土器の多くが口縁部～頸部にかけての破片が集中しており、胴部の破片が認められない点、また深鉢形土器についてもほぼ半分の破片が認められなかった点を考慮するならば、これらの遺物の現位置性は低く、やはり河川の浸食・堆積作用によって散在したものと考えることができる。

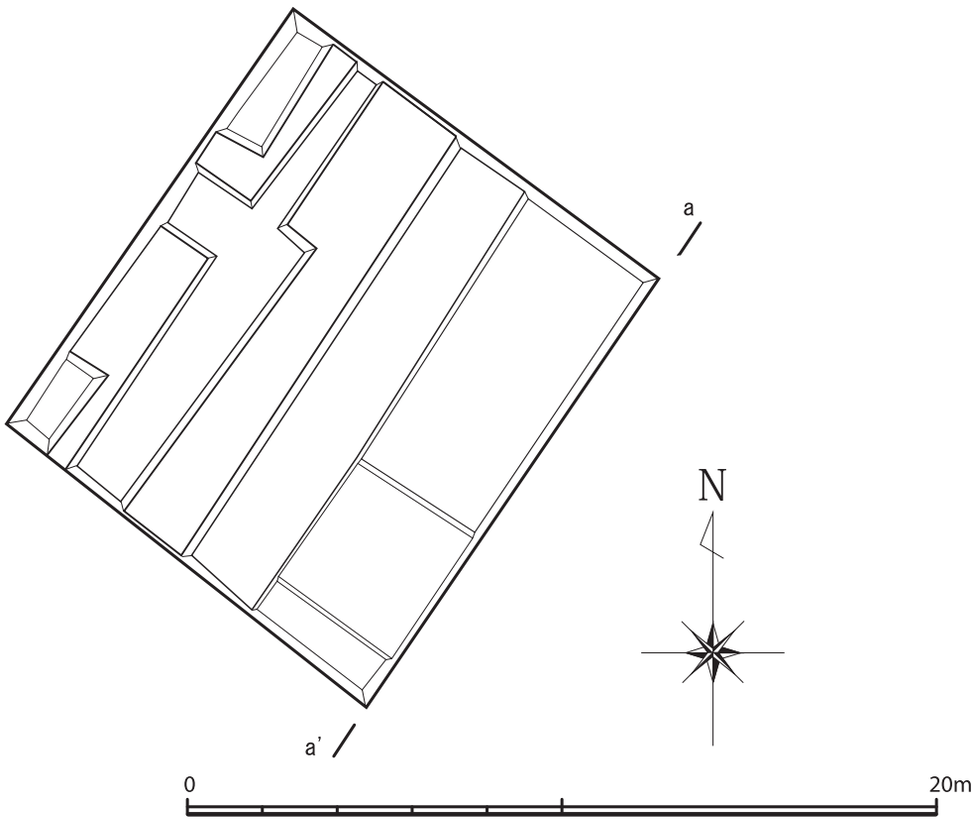
破片が比較的大きく、かつまとまった状態で出土していることから、その移動距離は極めて短く、調査区近隣にこれらの遺物を伴う集落跡が存在した可能性が高いと考えられる。

その一方で、Ⅳ層出土の遺物は小片が多く、出土状況においてもまとまりが認められなかった点から、Ⅵ層出土遺物に比べその移動距離が長く、その結果として摩耗度が高い小片が多くなったものと考えられる。

出土遺物（第６～ 11 図）　　Ｂ区出土遺物は、コンテナ４箱程度の土器および数点の石器が出土しており、土器は縄文時代後期から晩期のものである。上述のとおり、Ｂ区では円礫層、砂層が互層状に堆積していることから、出土層位ごとに土器の特徴を述べたい。いずれの遺物も内外面の調整が摩耗により詳細不明のものが多い。よって、本報告では、形態的特徴を中心に時期推定の手がかりとした。なお、部位が特定でき、形態的特徴が把握しやすい口縁部を重点的に図化してある。

Ⅵ層出土土器 ３は、東壁沿いで出土した深鉢形土器で、唯一完形に復原しうる資料である。口縁部文様帯がやや内傾して立ち上がり、三条の沈線を施す。また、肩部に１条の沈線を施す。本来は外面調整がミガキであったと考えられるが、磨耗によりわずかにナデの痕跡を残すのみである。内面は、肩部を中心として貝殻によるものと思われる条痕が認められる。底部は高台状に粘土を貼り付け、上げ底とする。これらの特徴は、天城式土器に該当するもので、沈線の条数や口縁部の形態などから清田分類の天城１式土器に相当する（清田 1998）

浅鉢形土器（４～７）も、やや短い口縁部文様帯に２条～１条の沈線を施すもので、６については山形突起を有する。波頂部や刻み目が施され、文様帯の沈線上に凹点が施される。深鉢形土器と同様に天城１式に相当するものと思われる。８は、縄文時代晩期の黒川式の浅鉢で、一部にミガキが残る。



第 4 図　B 区平面図 （S ＝ 1/200）

鉢形土器（9）は、口縁部文様帯に 2 条の沈線を施し、肩部に沈線を施す。外面調整はミガキによるものと思われるが、摩耗のため単位等については不明である。

この他に浅鉢形や鉢形土器の口縁部片（11 ～ 16）が出土しているが、いずれも口縁部文様帯に 1 ～ 2 条の沈線を施すという点で共通する。鉢形土器の頸部（17）は、9 と同様に肩部に 1 条の沈線を有し、これらの特徴から天城 1 式相当の土器が主体であるといえる。

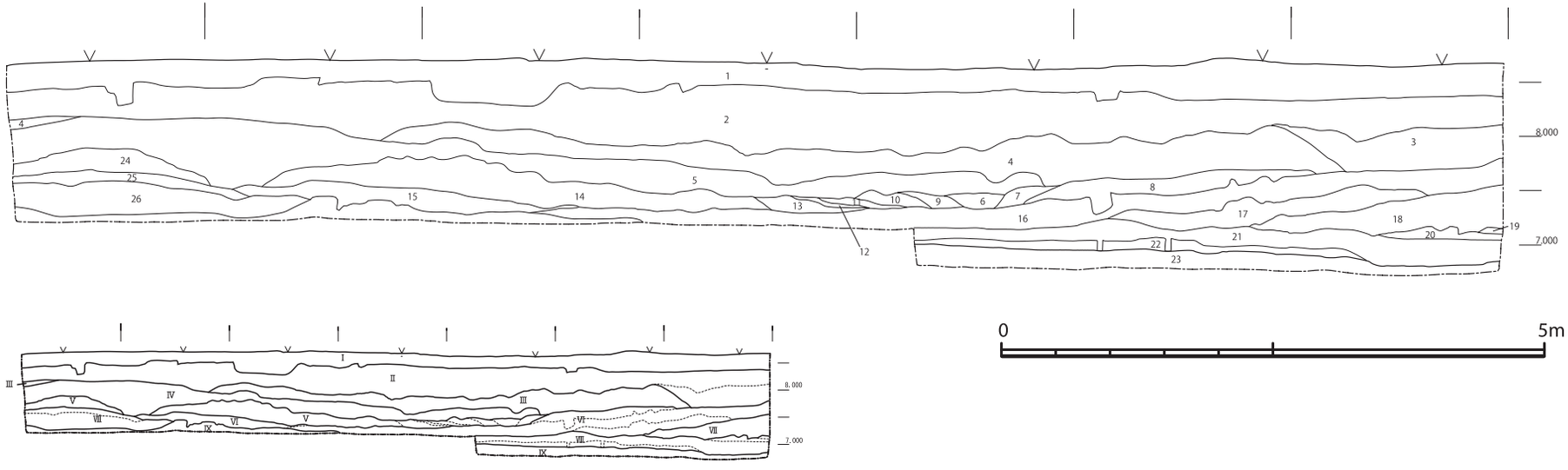
その一方で、19 や 20 などの浅鉢形土器は頸部が極めて短く、わずかに屈曲するのみで、天城式に後続する晩期初頭の古閑式に見られる形態である。

口縁部文様帯を持たない粗製の土器として、21・22 がある。いずれも口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめる。外面調整は摩耗により詳細は不明であるが、おそらくナデによるものと思われる。

24 は分蔵遺跡で出土した土器の中で唯一胴部外面に線刻を有する土器である。胴部最大径部分に横方向の沈線を 1 条施し、その上部には 2 条 1 組の弧状沈線が施される。また胴部下半については 2 条 1 組の縦長の弧状沈線が施される。現段階では同じ文様構成をもつ類例は見られないが、数条の弧状沈線を施す点などは、近畿地方で晩期土器として位置づけられる滋賀里式系の文様構成に類似する。九州では、古閑式段階から滋賀里式の影響を受けて沈線を施すものが見られることから、24 についても同様の時期が想定される。なお、県内においても滋賀里式系の文様を持つものがあるが、本例と同様の文様構成を持つものは認められない。

口縁部片は突帯の貼り付け方法や沈線の有無などから、概ね 4 類に分類しうる。

1 類（25 ～ 27）：口縁部を強いナデにより成形し、その際にはみ出した粘土をナデ等により成形し、偽突帯状をなすもの。

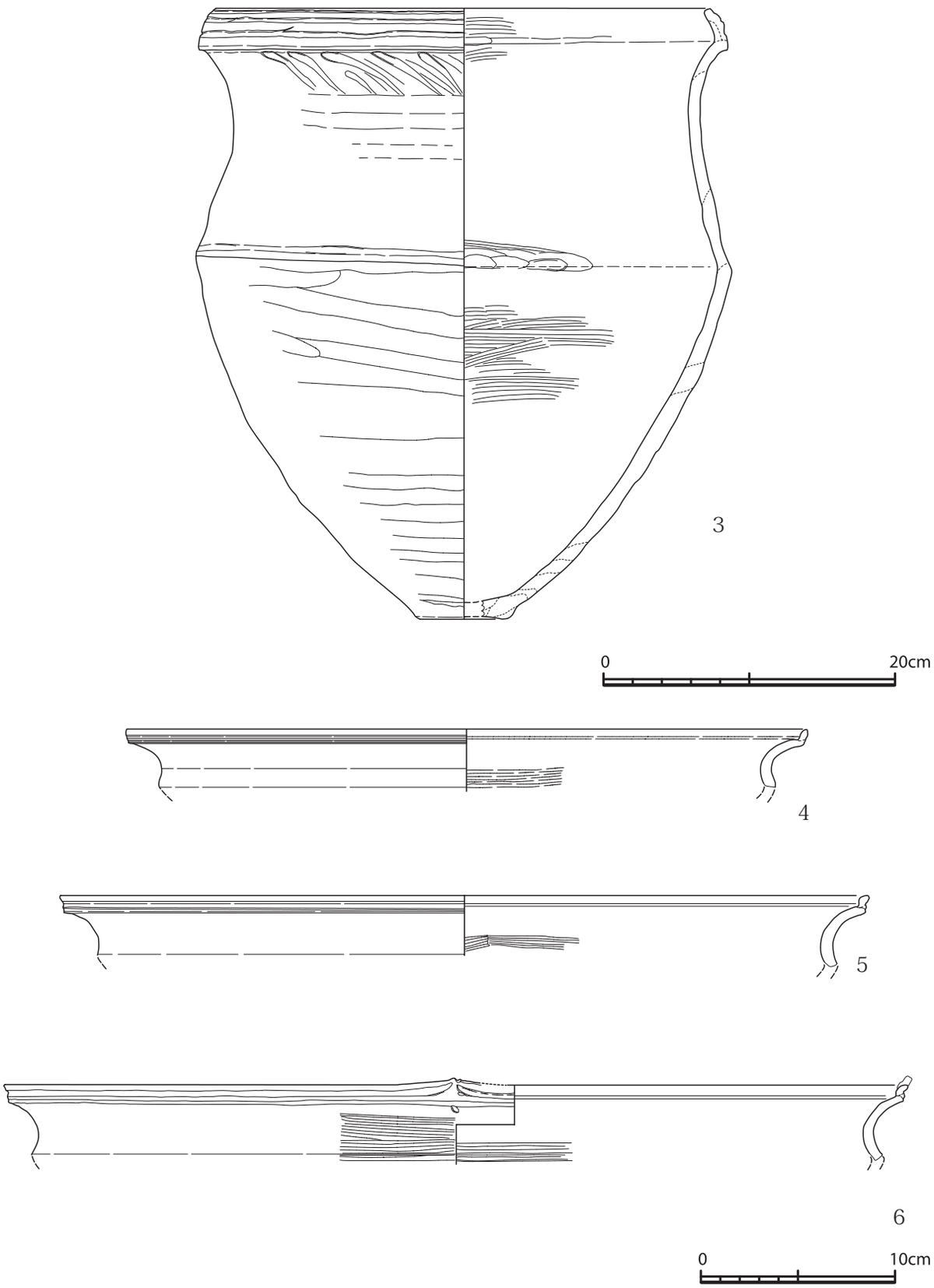


—大別層位模式図—

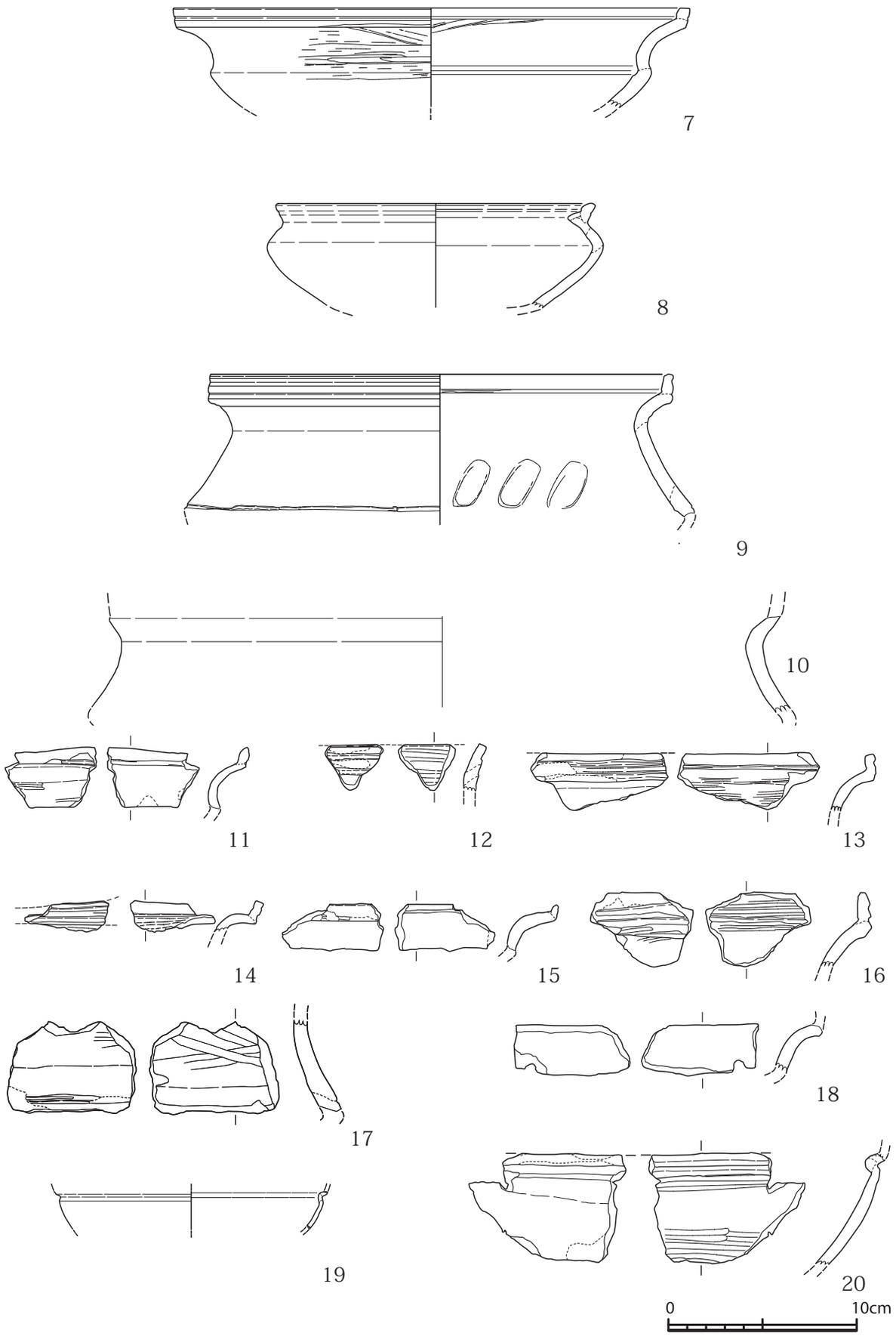
No.	層名	色調	性質	しまり	粘性	備考
1	表土（造成土）					
2	黄褐色土層	10YR5/8	砂質土	強い	弱い	砂利をまばらに含む。小礫を含むがその密度は不均質。
3	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	2層に比して小礫を密に含む。
4	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利を密に含む。また小礫を多く含み、ブロック状にまとまりが見られる。
5	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	砂利の小礫をごくまばらに含む。小礫をごくまばらに含む。
6	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利、及び小礫を密に含む。
7	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	弱い	弱い	砂利、及び小礫を密に含む。
8	褐色土層	10YR4/6	砂礫土	強い	弱い	砂利を密に含む。粒子の細かな砂利層。
9	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利をまばらに含む。また、小礫をごくまばらに含む。
10	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利、及び 1㎝大の小礫を密に含む。
11	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	砂利、及び 1㎝大の小礫をまばらに含む。
12	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	砂利をごくまばらに含む。
13	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	小礫をまばらに含む。
14	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利、及び小礫を密に含む。
15	褐色土層	10YR4/6	砂質土	弱い	強い	砂利をまばらに含む。粒子が粗い砂質土。炭をまばらに含む。

No.	層名	色調	性質	しまり	粘性	備考
16	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	砂利をまばらに含む。粒子が粗い砂質土。
17	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	砂利をまばらに含む。粒子が粗い砂質土。
18	黄褐色砂礫層	10YR5/6	砂礫土	強い	弱い	砂利、及び小礫を密に含む。
19	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利をまばらに含む。粒子が粗い砂質土。
20	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	弱い	強い	砂利をごくまばらに含む。粒子の細かい砂質土。炭をまばらに含む。
21	黄褐色土層	10YR5/8	砂質土	強い	強い	砂利をごくまばらに含む。粒子の細かい砂質土。炭をまばらに含む。
22	黄褐色土層	10YR5/8	砂質土	強い	強い	砂利をごくまばらに含む。粒子の細かい砂質土。炭をまばらに含む。
23	黄褐色土層	10YR5/8	地山	強い	非常に強い	砂利をごくまばらに含む。
24	黄褐色砂礫層	10YR5/8	砂礫土	強い	弱い	砂利、及び小礫を密に含む。
25	黄褐色土層	10YR5/6	砂質土	弱い	強い	砂利をごくまばらに含む。粒子の細かい砂質土。炭をまばらに含む。
26	黄褐色土層	10YR5/8	砂質土	強い	強い	砂利をごくまばらに含む。粒子の細かい砂質土。炭をまばらに含む。

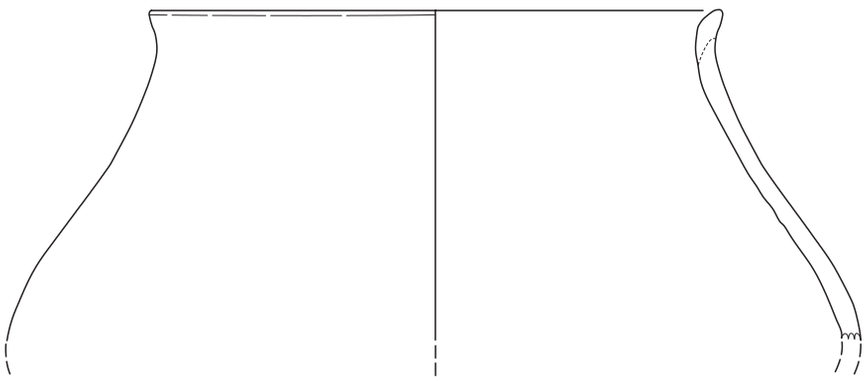
第５図　Ｂ区東壁土層断面図　（Ｓ＝1/60）



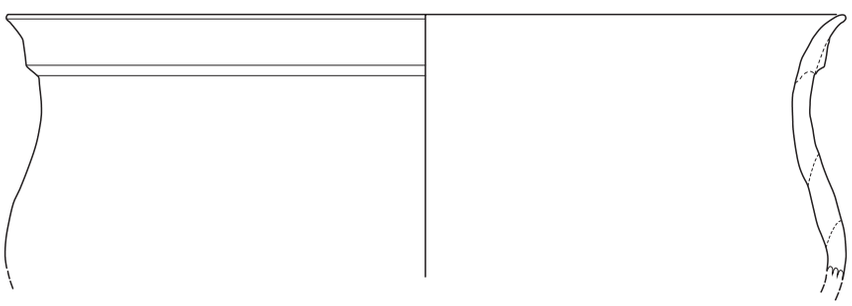
第６図　Ⅵ層出土土器　（３は S=1/4、ほかは S ＝ 1/3）



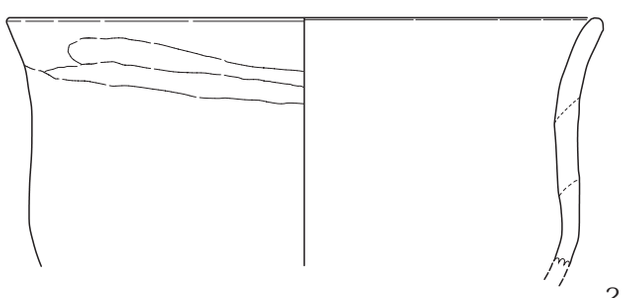
第７図　Ⅵ層出土土器　（S＝1/3）



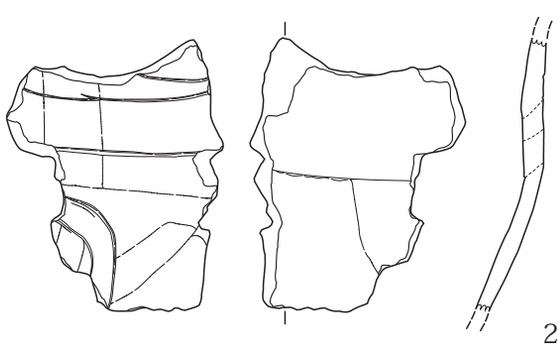
21



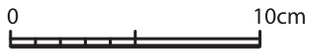
22



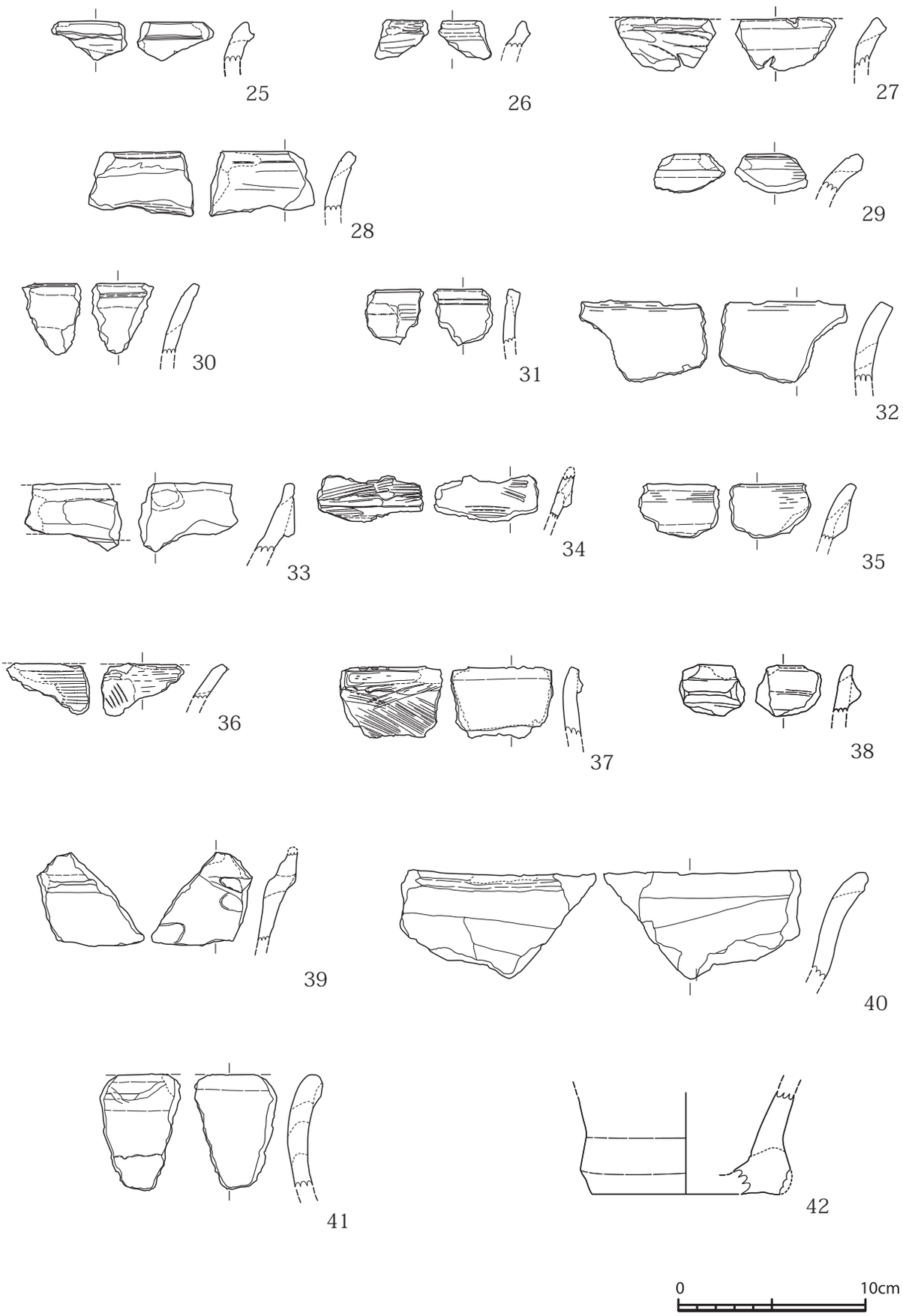
23



24



第８図　Ⅵ層出土土器　（S＝1/3）



第９図　Ⅵ層出土土器　（S＝1/3）

2類（28 ～ 31）：外反、もしくは直立する口縁の内面に1条の沈線を施すもの。

3類（33 ～ 35）：口縁部外面にやや垂下する形で突帯を貼り付け、口縁部文様帯と同様に口縁部外面に平坦面を有するもの。無文。

4類（38、40）：口縁部に三角形の突帯を貼り付けるもの。

この他に、やや外反し無文のもの（32、36）や外面に凹線状にナデの痕跡が残るもの（41）などがある。上の分類のうち、4類は無刻目突帯文とすべき資料であり、また2類は無刻目突帯文土器の出現過程を考える上で重要視されてきた資料である。また、これまで注目されていないが、1類のように口縁部外面に偽突帯を有するものが認められており、無刻目突帯文に通じる要素を有している。器形が不明であるため、これらの遺物が器形や精粗の差によるものなのか、時期的な前後関係をもつものかを今後検討する必要があるだろう。

底部は、平底に近いもの（42）が出土しているが、口縁部片に比して出土量が少なく、詳細は不明である。

Ⅵ層出土遺物のうち、調査区東側でまとまった状態で出土した遺物は、3 ～ 6、21などである。精製器種についてはいずれも天城1式の特徴を有する一群で、一括性は高いものと考えられる。その他に、口縁部片には無刻目突帯文土器に相当するものが含まれている点や黒川式相当の浅鉢が出土していること、また晩期初頭の古閑式土器に類するものも認められることから、やや時期が下る遺物も含まれている。複数時期の遺物が同一層位から出土しているという点では分層にやや問題があるが、砂礫層の堆積を重視し、ここではⅥ層出土遺物として一括しておく。

Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ層出土土器　Ⅳ・Ⅲ層出土土器は細片が多く、また磨耗が著しい。黒川式の浅鉢形土器に特徴的な口縁部にリボン状の突起を有するもの（56、57）が出土していることから、Ⅳ層およびⅢ層は黒川式相当層と考えることができる。

口縁部の破片については、断面三角形の突帯を口縁部に貼り付ける4類が主体的であり、一部垂下状の突帯を貼り付ける2類が認められる。59は、4類の口縁部を有する土器であるが、復原すると器形がやや浅いボール状になる点が特徴的である。

Ⅵ層に比べ、底部の割合が高く、多くがやや上げ底（50、62、63）、もしく平底状（51、60、61）になる。

いずれも細片であり、59を除いて全形を窺いうる資料は認められない。

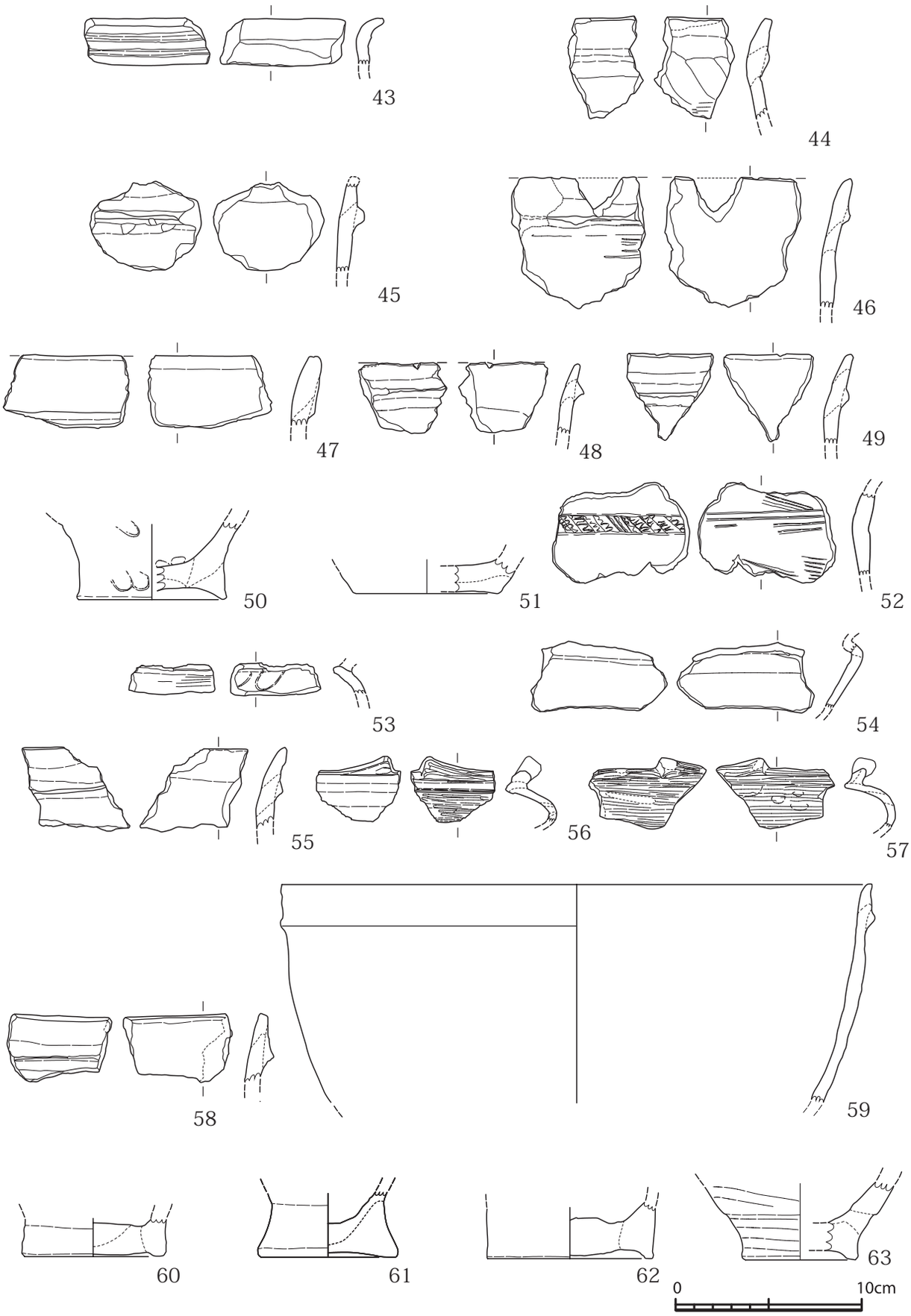
石器　B区では石錘が3点、打製石斧2点、横刃状石器1点、石鏃1点、剥片4点が出土しており、そのうち剥片を除く7点について図化した（第11図）。土器に比べ出土点数が極めて少ない。

石鏃はチャート製のものが1点出土している。先端が欠損しているものの、使用に伴うものかは判然としない。

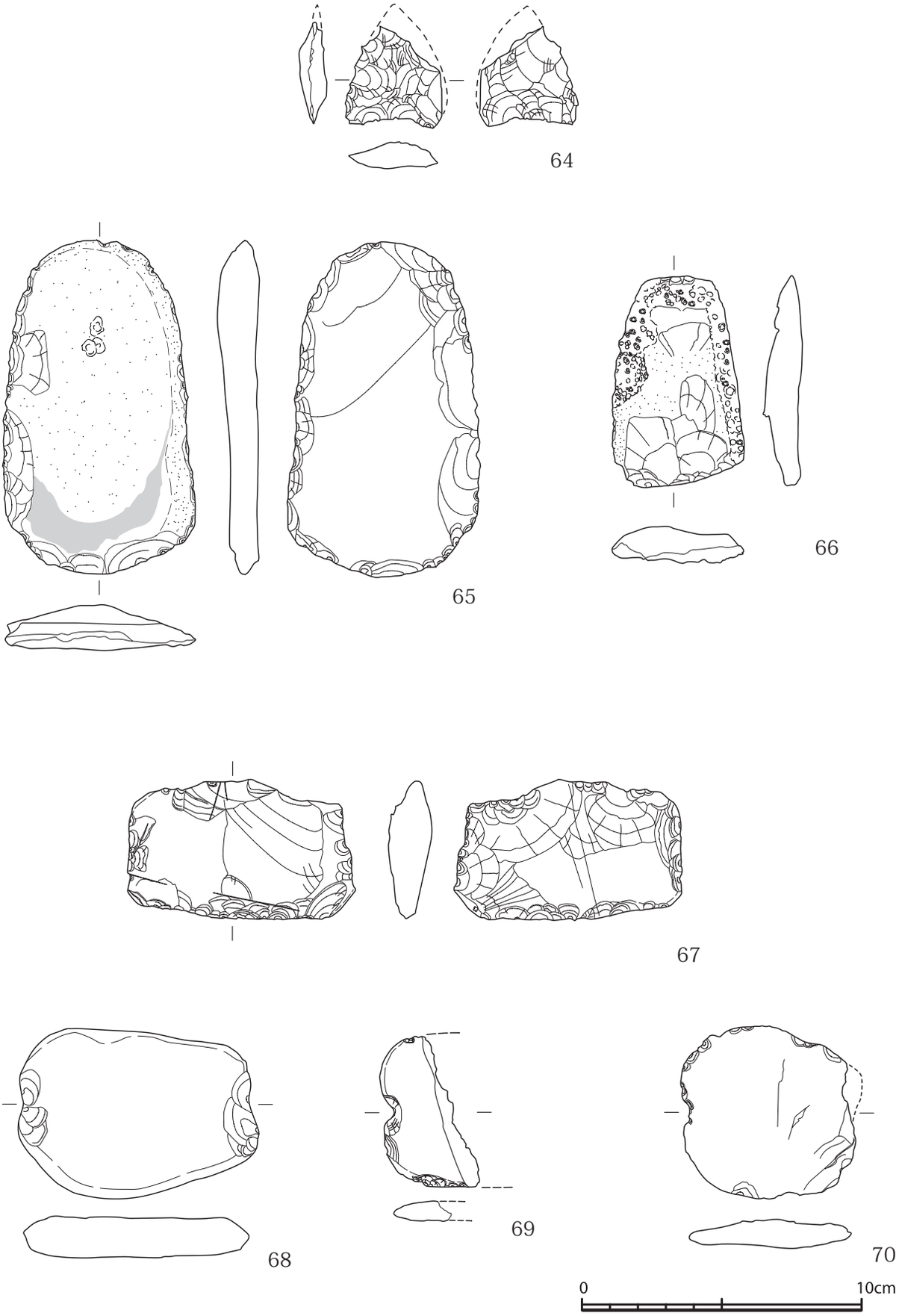
打製石斧は2点出土しており、65が砂岩製、66はホルンフェルス製である。65は砂岩の円礫を加工したもので縁辺部を加工し、石斧とする。67は刃部を除く3辺に敲打痕が残っており、台形状を呈するように丁寧に成形してある。いずれも片面に原礫面を残しており、円礫の片面を大きく剥離した上で縁辺部に二次加工を施すという技法で薄く仕上げている。

67は砂岩製で、部分的に原礫面が残るものの丁寧な二次加工が施されており、特に細かな剥離の見られる長辺を刃部を考え、横刃状石器としたものである。

石錘は、いずれも打ち欠き石錘で、先行調査で出土したものと同様に河原石や円礫層中に多く含まれる砂岩製の円礫を加工したもの（68）と、層状に剥離するホルンフェルス製の石錘



第 10 図　Ⅳ層・Ⅲ層・Ⅱ層出土土器　（S = 1/3）



第 11 図　B 区出土石器　（64 は S-1/1、その他は S ＝ 1/2）

（69、70）がある。ホルンフェルス製の石錘については、全体形を整えるために側縁にも加工が施されており、70 はほぼ正円形に近い形態を呈する。

Ⅵ層出土遺物は概ね縄文時代後期末に位置づけられる天城式段階、またⅣ層出土遺物は黒川式土器、無刻目突帯文土器を伴う晩期のもので、前者は古閑式、黒川式に相当する土器が含まれるなど若干の時期幅が認められる。しかし、砂礫層などの堆積状況を考慮すれば、比較的短期間に埋没したと考えるのが妥当であろう。おそらく縄文時代晩期初頭以降、当地は河川による浸食作用の影響を大きく受けていたと考えられる。

また、分蔵遺跡では天城式の深鉢形土器が出土したⅥ層及びⅧ層を中心として土砂サンプルを採取し、フローテーションを行った。

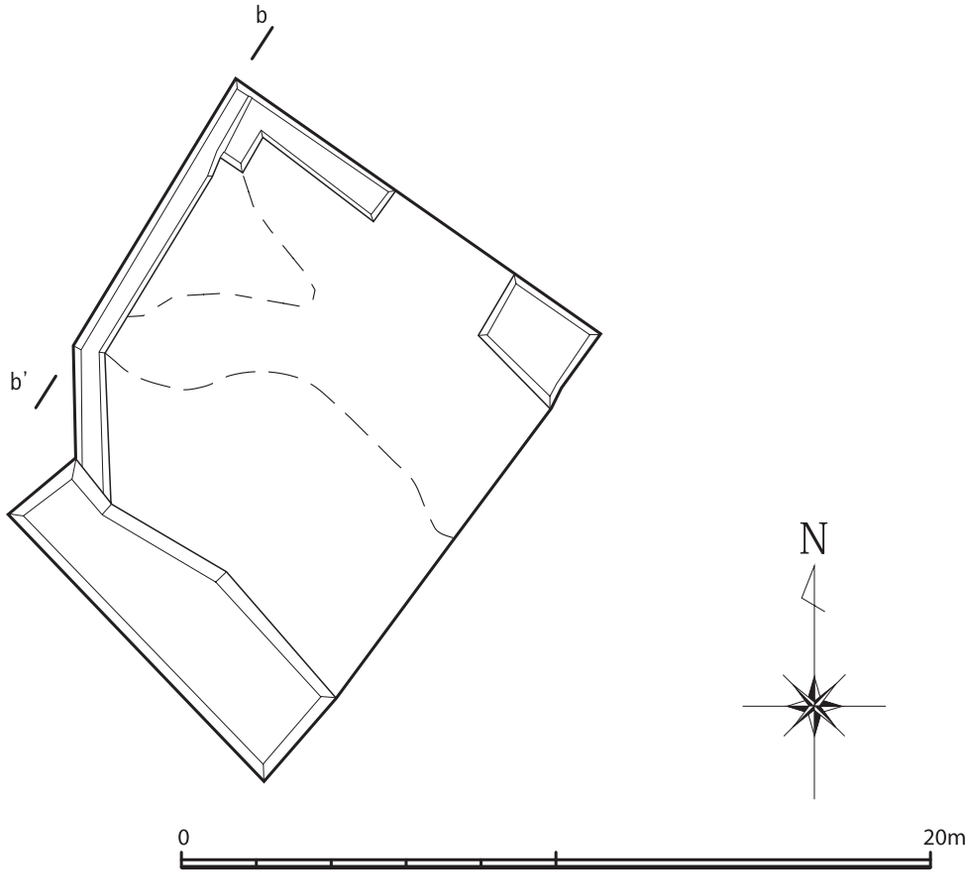
縄文時代後期末の土器が集中する層位から種子やイネなどの栽培種の検出を目的として行ったが、ごくわずかな種子の細片を検出したに留まり、期待した成果は得られなかった。

第２節　Ｃ区

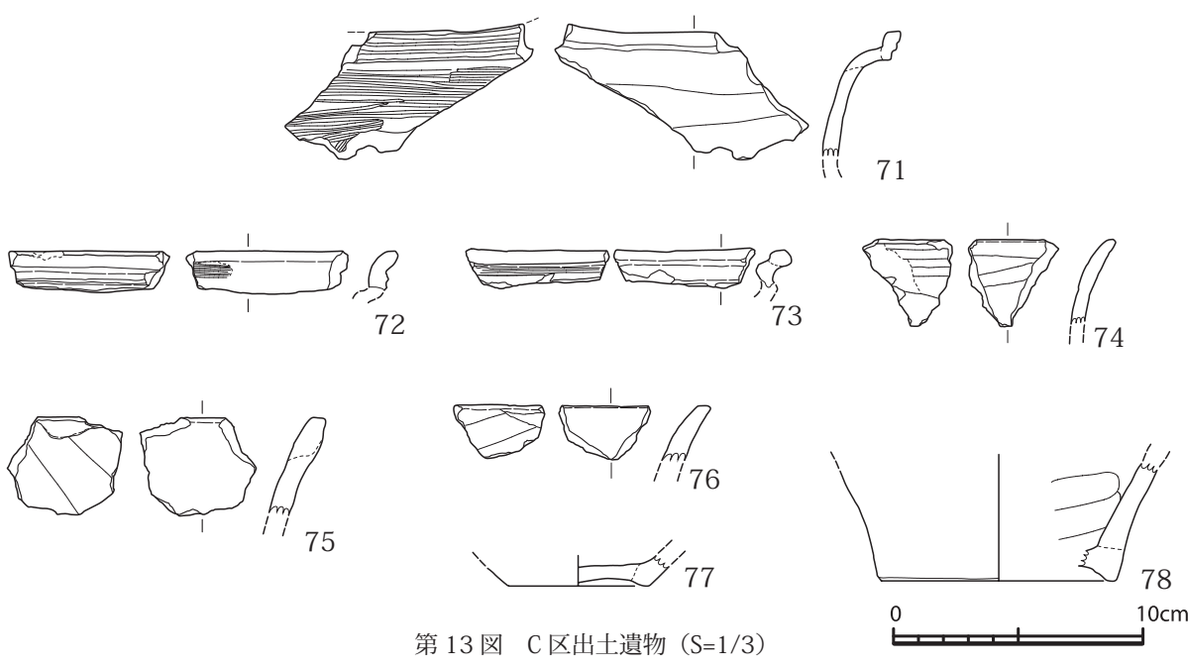
層位と遺構　Ｃ区もＢ区と同様に円礫、砂利を多く含む砂礫層と黄褐色の砂質土層で構成される（第 12・14 図）。土層断面の検討では、Ｂ区に比べてそれぞれの砂利、砂礫層の単位が細かく、きわめて頻繁に浸食・堆積作用を受けたものと考えることができる。堆積状況からいくつかの単位が認められるが、Ｂ区とは異なり層状に堆積していないため、遺物包含層の認定が難しく、出土層位による時期差の判断ができない。また調査区の南半分では重機による造成土掘削を終えた段階で地山面が露出しており、遺構は確認できなかった。

出土遺物（第 13 図）　出土遺物はコンテナ１箱程度で、すべて土器片である。そのうち、８点を図化した。71 は、口縁部文様帯がやや狭い鉢形土器の口縁部で、外面は丁寧にミガキが施されている。72、73 は、黒川式に相当する浅鉢形土器の口縁部である。Ｂ区で多くみられた無刻目突帯文を有するものは少なく、多くがやや外反する口縁部をもつものである。74 は端面をやや尖り気味におさめるが、75・76 については端面が面を成している。

底部は、やや上げ底になると思われるものが２点出土しているが、いずれも断片資料のため、詳細は不明である。

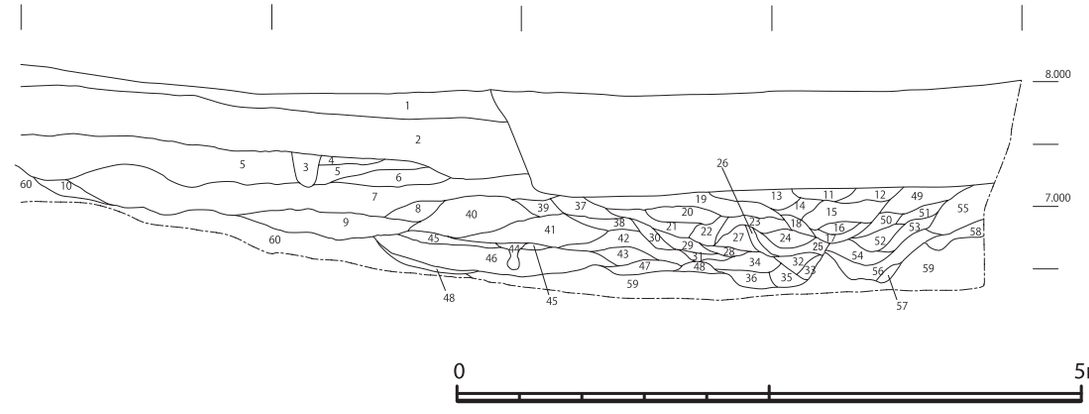


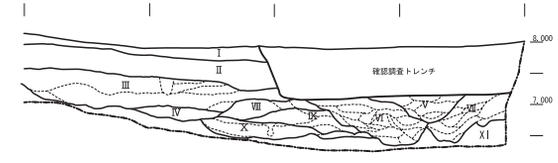
第 12 図　C 区平面図（S=1/200）



第 13 図　C 区出土遺物（S=1/3）

No.	層名	色調	性質	しまり	粘性	備考
1	表土					
2	にぶい黄褐色粘質土層	10YR5/4	粘質土	強い	強い	角礫・円礫・砂利をまばらに含む
3	にぶい黄褐色粘質土層	10YR4/3	粘質土	強い	強い	円礫、砂利を密に含む。
4	にぶい黄褐色粘質土層	10YR5/4	粘質土	強い	強い	円礫、砂利を密に含む。
5	にぶい黄褐色砂質土層	10YR5/4	砂質土	強い	弱い	砂利を含み、小礫が少量混じる。
6	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利、1㎝大の小礫をまばらに含む。
7	黄褐色砂質土層	10YR5/8	砂質土	強い	弱い	粒子のやや粗い砂質土をベースに砂利、小礫をまばらに含む。
8	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	強い	弱い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂岩の角礫、円礫、炭粒を若干含む。
9	黄褐色粘質土層	10YR4/4	粘質土	強い	弱い	砂岩の角礫、小礫を若干含む。
10	褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	強い	砂岩の角礫、小礫を若干含む。角礫、小礫を若干含む。
11	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	弱い	強い	砂利を少量含む。
12	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	弱い	強い	砂利をやや密に含む
13	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	弱い	強い	砂利をやや密に含む
14	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利を少量含む。
15	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利を密に含み、小礫が少量混じる。
16	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利と小礫をやや密に含む。
17	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利と小礫をやや密に含む。
18	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利と小礫をまばらに含む。
19	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	弱い	砂利を少量含み、小礫まばらに含む。
20	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	粒子のやや細かい砂質土をベースに若干の砂利、少量の小礫を含む。
21	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	20層に比べ、やや小礫が少ない。
22	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	強い	弱い	小礫をやや密に含む。
23	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利をやや密に含む。
24	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利を少量含む。ベースの砂質土の粒子がやや細かい。
25	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	粒子のやや細かい砂質土をベースに若干の砂利、小礫を含む。
26	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	25層に比して小礫がやや少ない。
27	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利と小礫をやや密に含む。
28	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利と小礫を少量含む。
29	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	弱い	弱い	砂利をやや密に含む。
30	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	弱い	弱い	28層に似るが、より砂利が多い。
31	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利と小礫を密に含む。
32	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	砂利と小礫をやや密に含む。炭粒を若干含む。
33	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	31層に似るが、砂利はやや少ない。
34	褐色砂礫層	10YR4/4	砂礫	強い	弱い	砂利と小礫を極めて密に含む。
35	黄褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	弱い	粒子のやや細かい砂質土をベースに炭粒が密に含まれる。
36	にぶい黄褐色砂質土層	10YR5/3	砂質土	弱い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂利がまばらに含まれる。
37	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	弱い	弱い	砂利を密に含み、小礫をやや密に含む。
38	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	弱い	弱い	砂利を密に含み、小礫をやや密に含む。
39	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	弱い	弱い	砂利を密に含み、小礫をやや密に含む。
40	砂礫層	10YR4/4	砂礫	強い	-	砂利をベースに、2cm 大の小円礫を極めて密に含む。
41	褐色砂質土層	10YR5/4	砂質土	強い	弱い	砂利を密に含み、1㎝大の小円礫をまばらに含む。
42	砂礫層	10YR5/4	砂礫	強い	-	砂利をベースに、1㎝未満の小円礫を密に含む。
43	砂礫層	10YR5/4	砂礫	強い	-	砂利をベースに、2cm 大の以上の円礫を密に含む。
44	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	砂質土	弱い	強い	砂利を少量含み、若干砂岩角礫が混じる。
45	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	砂質土	弱い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに若干砂岩の角礫が混じる。
46	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	弱い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに若干の炭粒を含む。
47	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	弱い	強い	粒子の細かい砂質土をベースに砂岩角礫、小円礫、炭粒を若干含む。
48	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	弱い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂岩角礫がやや密に含まれる。
49	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂利が少量含まれる。
50	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	49層に似るが、若干砂利が少なく、炭粒が混じる。
51	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	50層に似るが、炭粒を含まない。
52	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	砂利をやや密に含む。
53	黄褐色砂質土層	10YR5/6	砂質土	強い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂利を若干含む。
54	褐色砂質土層	10YR4/4	砂質土	強い	強い	粒子のやや細かい砂質土をベースに砂利を若干含む。
55	にぶい黄褐色砂質土層	10YR5/4	砂質土	強い	弱い	粒子のやや細かい砂質土をベースに、炭粒、砂岩の小礫が若干混じる。
56	褐色砂質土層	10YR4/6	砂質土	強い	強い	砂利、2㎝大の小礫を密に含む。
57	にぶい黄褐色砂質土層	10YR5/3	砂質土	弱い	強い	粒子の細かい砂質土をベースに若干砂岩の小礫を含む。
58	にぶい黄褐色砂質土層	10YR5/3	砂質土	弱い	強い	粒子の細かい砂質土をベースに若干砂岩の小礫を含む。
59	黄褐色粘質土層	10YR5/6	粘質土	弱い	非常に強い	地山
60	暗褐色粘質土層	10YR3/4	粘質土	強い	非常に強い	砂岩の角礫を密に含む。地山。





—大別層位模式図—

第 14 図 C 区西壁土層断面図

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　分蔵遺跡出土土器の評価

天城１式土器の良好な一括資料が出土したＢ区を中心に、分蔵遺跡における土器の様相を簡単にまとめておきたい。

縄文後期末～晩期の土器編年　出土遺物の項でも述べた通り、天城１式を伴うⅥ層については、明らかに後続する土器形式が含まれる点でその出土層位における一括性はあまり高いとは言えない。しかし、天城１式に相当する遺物の多くが調査区東側にまとまった状態で出土していることから、それらの遺物群については一括性が高いと判断される。晩期の土器編年については、清田純一を初めとして、水ノ江和同など近年盛んに論じられるテーマの一つである。しかし、その多くが良好な一括資料とその前後関係に重点をおいたもので、土器そのものの型式学的検討、および地域間の比較が十分とは言いがたいのが現状である。

分蔵遺跡では、土坑一括資料などの良好な一括性を有していないものの、出土遺物の特徴から比較的まとまった時期のものであると想定される。その点は、この遺跡が河川の増水などによって埋没した可能性が高いことの根拠ともなりえるだろう。しかし、出土遺構の一括性に依存した従来の研究では、形態的特徴とその変遷、あるいは関連性に対する認識が低く、分蔵遺跡のように出土状態の悪い遺跡ではなかなか踏み込んだ議論に発展しないのが現状である。その問題点を踏まえて、分蔵遺跡出土の土器の形態的特徴からの編年体系の構築に向けて若干触れておきたい。

無刻目突帯文土器の成立過程　これまで無刻目突帯文土器の出現過程については、泉拓良のように浅鉢形土器から派生したと考える立場と、深鉢形土器の口縁部から派生したと考える２者が存在し、中にはその両方の要素を考慮する研究者もいる（家根など）。本遺跡で分類した３類が後者、すなわち深鉢形土器の口縁部文様帯から派生したと考える根拠となりえるもので、文様は施されないものの、確かに形態的には類似する。しかし、分蔵遺跡で認められた１類の存在は注目すべきであると考える。すなわち偽突帯状のものが無刻目突帯へと派生した可能性も高いのではないだろうか。分蔵遺跡Ｂ区のⅥ層中では４類に分類した口縁部が全て認められ、いずれも混在しており、天城式土器を主体としつつも黒川式土器を含むという特徴が如実に現れている。しかし、黒川式および無刻目突帯文土器のみで構成されるⅣ層からは、３類や４類は認められるものの、１類は含まれていない。

土器の多様性と編年　１類は技法的に安定したものではないため、イレギュラーとして捉えることも可能かもしれないが、これまでイレギュラーとされてきた土器に着目することで、土器の形態的特徴の把握という原点に立ち返る必要がある。分蔵遺跡出土資料では出土状況に基づいた考察が難しいため、これ以上の議論はできないが、土器の型式学的検討と出土状況とのクロスチェックを通して九州における該期の土器編年を構築していく必要があるだろう。

第２節　調査のまとめ

―分蔵遺跡の評価―

石器の多様性と生業戦略　前節で述べたように、分蔵遺跡出土の土器は、全形を窺い知る資料は少ないものの、当地の土器編年、そして中九州を中心とする土器編年を考える上でも重要な成果を示している。

その一方で、出土数を多くないが多様な石器が出土していることも看過できない。石錘は、砂岩製とホルンフェルス製の２つの石材が利用

されているが、いずれも打ち欠き石器である点や、出土層位による偏りが見られない点などから、両者の間に石材選択性を見出すことはできない。しかし、砂岩製の石錘は短辺側を打ち欠くのみであるのに対し、ホルンフェルス製の石錘はさらに縁辺部を加工し、全体が円形ないし楕円形を呈するように整形されているのが特徴である。

この点を考慮しても石錘の製作にあたって加工の容易な石材を選択するというよりも、石錘に必要な形態を満たす「扁平」かつ「円形」の礫であることが重要視され、選択されたと考えられる。石斧については、若干の石材の相違があるものの、いずれも片面を剥離し、縁辺部に加工を施すという方法で製作されている。

これらの石器についても多くが河原石等に含まれる砂岩製の円礫を加工したものであり、近隣で採取可能な石材を積極的に利用していることが分蔵遺跡の特徴として挙げられるだろう。

出土した石器は、打製石斧、石錘、石鏃、横刃状石器、敲石など多様で、多様な生業戦略のもとに営まれた集落が近隣に存在したものと考えられる。

分蔵遺跡が、山間部と平野部の境界域に所在することや五十鈴川河畔に立地することを考慮すれば、石器の多様性は遺跡の立地環境と密接に関連していると考えられる。

分蔵遺跡とその周辺　　分蔵遺跡の調査では、良好な一括遺物が出土するなど、貴重な成果を挙げることができたが、残念ながら住居跡などの遺構が確認できていない。当地が五十鈴川の浸食・堆積作用を受けていたと考えられることが要因の一つであり、実際に河川堆積によると思われる砂礫層が互層状に認められている。

出土遺物の多くがそういった河川の運搬作用に伴って当地にたどり着いたと考えられるわけだが、その出土状態や残存状態から推察するに時期によってやや様相が異なる。縄文時代後期末葉の遺物は破片が大きく、かつ比較的まとまった状態で出土しているが、一方で晩期の遺物は細片が多く、また表面の磨耗も激しい。この両者の差異は、おそらくその給源となる集落との距離に大きく依存していると思われる。すなわち、後期末葉はごく近隣に、晩期にはやや離れた場所に集落が営まれていたと考えることができるだろう。

門川町内で確認されている縄文時代の遺跡は、いずれも後期～晩期にかけてのもので、門川町域ではこの時期に集落造営が盛んになり、人の居住が進んだものと思われる。

五十鈴川の河口付近に位置する門川南町遺跡では、ほぼ同時期の遺構・遺物が出土しているが、天城式期に相当する時期の資料は欠落しており、後期前葉～中葉、及び晩期の黒川式、無刻目突帯文段階のものが中心である。また門川南町遺跡では、後期前葉～中葉に関しては瀬戸内系や南九州系の土器を主体としており、中九州系の土器を主体とする分蔵遺跡とは対照的である。日向灘を利用した南北方向の活発な交流を示すものと考えることができる。

その一方で、分蔵遺跡では、後期末の段階では中九州系の土器である天城式土器を主体としており、貝殻施文を持つ土器も認められるが、ごくわずかであることから、五十鈴川を利用した東西方向の交流が想定される。その点は、前段階の三万田式を伴う赤木遺跡が五十鈴川上流に認められることを考慮すれば、縄文後期には五十鈴川を利用した東西交流が活発であったと想定される。

出土遺物からみた分蔵遺跡は、縄文時代後期に関しては中九州地域との親縁性が高く、晩期段階では黒川式や無刻目突帯文土器が出土するなど、南町遺跡と同様の特徴を示す。晩期土器群の出自についてはさらなる検討が必要であるが、分蔵遺跡の調査を通して無刻目突帯文の出現過程についても重要な資料を提示することができた。門川町域、あるいは宮崎県北部地域における縄文時代後期～晩期にかけての社会像を

探る上で、重要な遺跡となることを期待したい。

【参考文献】

安藤栄治・高橋信武 1982「大分県宮地前遺跡の採集資料―大分の晩期前半を中心にした土器編年―」『赤れんが』第２号　赤れんが刊行会　p.1-48

泉拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第８集　p.55-79

大塚達朗 1995「橿原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 13 号　東京大学文学部　p.79-141

岡田憲一 1998「１．１期　縄文時代（滋賀里Ⅲａ式段階）の遺物」『秋篠・山陵遺跡―奈良大学附属高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書・第 17 集　秋篠・山陵遺跡調査会　奈良大学文学部考古学研究室　学校法人正強学園　p.104-114

岡田憲一 2000「西日本縄紋後期後葉土器編年序論―向出遺跡出土土器の研究―」『向出遺跡』一般国道 26 号（第２阪和国道）の建設に伴う発掘調査報告書　（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 55 集　財団法人大阪府文化財調査研究センター　p.317-351

岡田憲一 2003「滋賀里式再考―西日本縄文晩期土器様式の構造転換―」『立命館大学考古学論集』Ⅲ -1　家根祥多さん追悼論集　立命館大学考古学論集刊行会　p.143-156

清田純一 1998「縄文後・晩期土器考―中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について―」『肥後考古』第 11 号　肥後考古学会 p.35-66

小南裕一 2006「日韓農耕文化成立期の土器編年と併行関係（予察）」『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』日韓交流史理解促進事業実行委員会　p.110-117

下山覚 1985「「黒川式土器」細分の為の基礎論」『鹿大考古』第３号　鹿児島大学法文学部考古学研究室　p.88-97

下山覚 1988「九州縄文晩期の深鉢形土器の型式変化について―空間を横断する情報と時間を縦断する情報―」『人類史研究』第７号　人類史研究会　p.5-30

堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』第 31 号　鹿児島考古学会　p.59-77

水ノ江和同 1997「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から刻目突帯文土器の直前まで―」『縄文時代』第８号　p.73-110

家根祥多 1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣出版

家根祥多 1994「篠原式の提唱―兵庫県篠原中町遺跡出土土器の検討―」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』p.50-139

山崎純男・島津義昭 1981「九州の土器」『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣出版　p.249-261

第１表　土器観察表

掲載№	区	層	器種	部位	外面	内面	焼成	胎土	色調
3	B	Ⅵ	深鉢	口縁部～底部	ほぼ完形に復原しうる個体。復元高 41.9㎝、同口径 34.4㎝、同胴部最大径 36.6㎝、同底部径 6.8㎝。胴部下半は粘土の単位を残す粗いヨコナデ。頸部も同様にナデ調整だが、屈曲部分にしぼりのような痕跡を留める。口縁部文様帯に断面「フ」字状の沈線を３状施し、沈線間はナデにより成形する。底部や粘土の貼り付けによってやや上げ底状を呈する。	胴部下半は不明。上半～肩部にかけて、貝殻によるものと思われる横方向の条痕が残る。外面と同様に肩部成形のヨコナデが条痕を切っている。頸部はヨコナデで、一部条痕の痕跡も認められる。口縁部文様帯内面もヨコナデを施す。	良好	粗。1.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：暗赤褐色 内面：暗赤褐色
4	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部～頸部	ミガキによる調整だが、摩耗により単位等詳細不明。口縁部文様帯外面には、２条の沈線が施される。	頸部付近にミガキが残る。口縁部文様帯との接合面に強いナデが施される。	良好	密。1.0㎜未満の長石・石英粒を多く含む。	外面：黒褐色 内面：褐灰色
5	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部～頸部	ミガキによる調整だが、摩耗により単位等詳細不明。口縁部文様帯外面には、２条の沈線が施される。	ミガキを施す。肩部の接合方法は、胴部内面に内傾して接合される。	良好	密。1.0㎜未満の長石・石英粒を多く含む。	外面：暗赤褐色 内面：黒褐色
6	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部～頸部	ミガキによる調整。口縁部文様帯には２条の沈線を施し、山形突起を有する。波頂部に刻み目が施され、下位の沈線上に 5㎜程度の凹点が施される。	ミガキを施す。口縁部文様帯との接合部に強いナデを施し、凹線状をなす。	良好	密。1.0㎜未満の長石・石英粒を多く含む。	外面：黒褐色 内面：褐灰色
7	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキののち、頸部、肩部は横方向のナデにより成形。胴部はミガキと思われるが、摩耗のため詳細不明。口縁部文様帯外面に断面「フ」字状の沈線を１条施す。沈線の上下はナデによる成形だが、下側はミガキの可能性がある。端部もナデ。黒斑がある。	頸部上半はナデ。それ以外はミガキ。口縁部文様帯接合部、肩部内面は工具を用いた強いナデを施す。摩耗により、ミガキの単位等詳細は不明。	良好	密。1.0㎜未満の長石粒を多く含む。1.0㎜程度の黒雲母をまばらに含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
8	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキの痕跡を残すが、摩耗により詳細不明。	摩耗により詳細不明。	良好	密。0.1㎜未満の砂粒をまばらに含む。	外面：暗赤褐色 内面：黒褐色
9	B	Ⅵ	鉢	口縁部～肩部	ミガキか。摩耗により詳細不明。口縁部文様帯に断面「フ」字状の沈線を２条施し、沈線間はナデにより成形。頸部屈曲部は、ナデ成形で一部に煤が付着する。肩部外面に連続した短い線を施し、界線とする。	頸部内面に右上がりのユビオサエの痕跡。肩部接合部分は強くナデて接合。口縁部文様帯接合部分も同様。ナデの痕跡を良く残しており、頸部屈曲部内面はミガキの可能性もあるが、摩耗により詳細不明。	良好	密。1.0㎜未満の砂粒（長石・石英）を密に含む。	外面：暗褐色（一部黒褐色） 内面：暗褐色
10	B	Ⅵ	鉢	頸部	ミガキか？摩耗により詳細不明。	ミガキか？摩耗により詳細不明。	あまい	粗。1mm 未満の砂粒を密に含む。	外面：黒褐色 内面：黒褐色
11	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部	一部にミガキの痕跡を残すものの、摩耗のため詳細不明。口縁帯下端に１条の沈線。	摩耗のため、詳細不明。	あまい	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の石英・長石・赤色粒を多く含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
12	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	横方向のナデ。外面に断面「フ」字形の沈線が２条。	上半部はナデ。下半部はミガキにより成形。	良好	密。1.0㎜未満の長石粒を多く含む。1.0㎜未満の石英・黒色粒・赤色粒をまばらに含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
13	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部	頸部はミガキ。口縁文様帯に断面「フ」字状の沈線を２条施す。沈線間をナデにより整形。	ミガキ。口縁文様帯内面はナデ。	良好	1.0㎜未満の長石・石英・黒雲母粒を密に含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
14	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部	ミガキ。摩耗により詳細不明。口縁部文様帯に２条の沈線。波状部付近。沈線間はナデにより成形し、口縁端部もナデ成形。	ミガキ。摩耗により詳細不明。口縁部文様帯帯貼り付けのため、内面に強いナデを施し、凹線状になる。	良好	密。1.0㎜未満の長石・石英・黒雲母・黒色・赤色粒を密に含む。	外面：黄褐色 内面：黒褐色
15	B	Ⅵ	浅鉢	口縁部	摩耗のため詳細不明。	摩耗のため、詳細不明。	あまい	密。1.0㎜未満の長石・石英粒を密に含む。1.0㎜未満の黒雲母粒をまばらに含む。	外面：褐色 内面：黒褐色
16	B	Ⅵ	鉢	口縁部	頸部はミガキ。口縁部文様帯に断面「フ」字状の沈線を２条施す。	横方向のナデ。口縁部文様帯との接合部に強いナデを施し、凹線状になる。	良好	1.0㎜未満の長石・石英・黒雲母粒を密に含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
17	B	Ⅵ	鉢	頸部	一部にミガキの痕跡を残すものの、摩耗のため詳細不明。肩部に界線を１条施す。	ミガキ。外面に比して単位が大きい。	良好	やや粗い。1.0㎜未満の長石・黒色粒を密に含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
18	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	磨耗により詳細不明。	磨耗により詳細不明。	不良	密。3.0 ～ 4.0㎜程度の長石粒をまばらに含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
19	B	Ⅵ	浅鉢	頸部～胴部	摩耗のため詳細不明。	摩耗のため詳細不明。	不良	粗。0.1㎜程度の砂粒を密に含む。1.0㎜程度の黒雲母をまばらに含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
20	B	Ⅵ	浅鉢	肩部～底部	ミガキ。肩部接合部分にナデ。	ミガキ。肩部接合部分にナデ。	良好	密。0.5㎜未満の砂粒を密に含む。	外面：灰褐色 内面：黒褐色
21	B	Ⅵ	深鉢	口縁部～頸部	摩耗により詳細不明。	摩耗により詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜程度の石英・長石粒を密に含む。	外面：淡黄褐色 内面：暗褐色
22	B	Ⅵ	深鉢	口縁部～胴部	口縁部に突帯を貼り付け、やや外反させる。	摩耗により詳細不明。	不良	粗。1.0㎜大の黒雲母をまばらに含む。1.0㎜大の長石・石英・赤色粒をまばらに含む。	外面：明赤褐色 内面：黒褐色
23	B	Ⅵ	深鉢		口縁端部はナデにより成形。	摩耗により詳細不明。	不良	粗。1.0㎜大の長石・石英粒を多く含む。	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色
24	B	Ⅵ	深鉢	胴部	ナデ。外面に沈線による文様。	ナデ。	あまい	粗。1.0㎜程度の石英・長石粒を密に含む。	外面：暗褐色 内面：暗橙褐色
25	B	Ⅵ	―	口縁部	横方向のナデ。口縁端部をナデにより成形し、外面に突帯状のものをつまみ出して成形。	横方向のナデ。口縁内面に１条の沈線を施す。	良好	0.5 ～ 1.0㎜程度の長石粒をまばらに、砂粒を密に含む。	外面：暗褐色 内面：明褐色
26	B	Ⅵ	ー	口縁部	横方向のナデ。口縁端部をナデにより成形し、外面に小突帯状に張り出す。	横方向のナデ。内面が凹線状にくぼむ。	良好	0.1 ～ 1.0㎜程度の長石・石英・赤色粒をまばらに含む	外面：褐色 内面：褐色
27	B	Ⅵ	―	口縁部	横方向のナデ。口縁端部をナデにより成形し、外面に小突帯状に張り出す。	横方向のナデ。平滑に仕上がっており、ミガキの可能性もあるが、摩耗のため詳細不明。	良好	密。1.0㎜程度の長石・赤色粒をまばらに含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
27	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	口縁部は横方向のナデ。突帯より下は詳細不明。	ユビオサエがあるが、詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜程度の石英・長石粒を密に含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
28	B	Ⅵ	―	口縁部	横方向のナデ。端部を丁寧に成形させており、口縁部直下がやや肥厚している。	横方向のナデ。口縁内面に１条の沈線を施す。	良好	0.1 ～ 1.0㎜程度の赤色粒を密に含む	外面：暗褐色 内面：明褐色
29	B	Ⅵ	ー	口縁部	摩耗により詳細不明。口縁端部を丁寧にナデており、面を成す。	横方向のナデ。口縁内面に１条の沈線。やや浅く、凹線気味。	良好	1.0 ～ 2.0㎜程度の長石・石英粒をやや密に含む。1.0㎜程度の赤色粒をまばらに含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
30	B	Ⅵ	―	口縁部	横方向のナデ。口縁端部を丁寧にナデており、面を成す。	横方向のナデ。口縁内面に１条の沈線。	良好	1.0㎜程度の長石粒をまばらに、2.0㎜程度の赤色粒をごくまばらに含む	外面：橙褐色 内面：橙褐色
31	B	Ⅵ	―	口縁部	ミガキ。口縁端部はナデにより成形。口縁端部を肥厚させるために粘土を貼り付けており、ハガレが見られる。	摩耗により詳細不明。内面に凹線が施される。	良好	組。1.0㎜程度の石英・長石粒を密に含む。1.0㎜未満の赤色・黒色粒をまばらに含む。	外面：黒褐色 内面：橙褐色
32	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	口縁端、外面をナデにより成形。下位は摩耗により詳細不明。	口縁はナデ。	良好	粗。1.0㎜～ 2.0㎜程度の石英・長石粒を多く含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
33	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	摩耗により詳細不明。ナデによる成形。	摩耗により詳細不明。ナデによる成形。	良好	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の石英・長石・赤色粒を多く含む。	外面：暗褐色 内面：褐色
34	B	Ⅵ	―	口縁部	条痕が見られる。突帯はナデにより成形。	条痕が残る。	不良	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の長石粒、赤色粒を多く含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
35	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	横方向のナデ。突帯の貼付により口縁帯を成形。無文。やや外反する口縁部	横方向のナデ。摩耗により詳細は不明。	良好	1.0㎜程度の長石・石英粒をやや密に含む。1.0㎜未満の赤色粒をまばらに含む。	外面：暗橙褐色 内面：黒褐色
36	B	Ⅵ	―	口縁部	ミガキ。端部はナデにより成形。端部外面に小突帯状に張り出す。	ミガキ。一部条痕を残す。	良好	組。1.0㎜程度の石英・長石粒を密に含む。1.0㎜未満の赤色粒をまばらに含む。	外面：黒褐色 内面：暗褐色
37	B	Ⅳ	鉢	口縁部	突帯下位に条痕が残る。その他は摩耗により詳細不明。突帯を貼り付ける。	摩耗により詳細不明。	あまい	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の長石・石英・赤色粒を多く含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
38	B	Ⅵ	深鉢？	口縁部	斜め方向のナデ。口縁部外面に粘土を貼り付け、突帯とする。突帯は全周せず、とぎれる。	ナデ。	不良	粗。1.0㎜程度の赤色粒をまばらに含む。1.0㎜未満の石英・長石粒を密に含む。	外面：黒褐色 内面：暗褐色
39	B	Ⅵ	―	口縁部	横方向のナデ。断面三角形の突帯を貼り付け。	横方向のナデ。	良好	密。1.0㎜程度の長石・赤色粒をまばらに含む。	外面：褐色 内面：褐色
40	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	摩耗により、詳細不明。	摩耗により詳細不明。ナデによる成形。	良好	密。0.1 ～ 0.5㎜程度の黒雲母をまばらに含む。1.0㎜程度の小礫をまばらに含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
41	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	口縁部付近は横方向のナデ。頸部には条痕が残る。口縁端外面はナデにより凹線状にくぼみ、段を成す。	横方向のナデ。	あまい	粗 1.0㎜程度の赤色粒・長石・石英粒を密に含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
42	B	Ⅵ	深鉢	口縁部	摩耗のため詳細不明。口縁は外反し、粘土を貼り付けて肥厚口縁とする。	摩耗のため詳細不明。	不良	粗。1.0㎜程度の長石・石英・赤色粒をまばらに含む。	外面：暗褐色 内面：暗赤褐色
43	B	Ⅳ	-	底部	復元径 11.2㎝。底部からやや外反気味に立ち上がる。摩耗により詳細不明。	摩耗により詳細不明。	不良		
44	B	Ⅳ	浅鉢	口縁部	詳細不明。２本の凹線。	ナデが見られるが、詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜未満の長石・石英・黒色粒を密に含む。	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色

第２表　土器観察表

45	B	Ⅳ	深鉢	口縁部	摩耗で詳細不明。突帯の貼り付けにより、口縁部文様帯とする。	口縁部は横方向、突帯裏には斜め方向のナデ、あるいはユビオサエ。	あまい	粗。1.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：淡黄褐色 内面：灰褐色
46	B	Ⅳ	鉢	口縁部	口縁部に横方向のナデ。外面に突帯を貼り付ける。	摩耗により詳細不明。	あまい	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：暗褐色 内面：暗褐色
47	B	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ。粘土を貼り付けて口縁部文様帯を成す。無文。	ナデ。	あまい	粗。1.0㎜～ 2.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：黄褐色 内面：黄褐色
48	B	Ⅳ	深鉢	口縁部	横ナデ。摩耗のため詳細不明。外面に突帯を貼り付け。	横ナデ。摩耗のため詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜未満の長石・石英・黒色粒を密に含む。	外面：褐色 内面：褐色
49	B	Ⅳ	-	口縁部	横方向のナデ。突帯より下は詳細不明。	ユビオサエがあるが詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜程度の石英・長石粒を蜜に含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
50	B	Ⅳ	-	底部	ナデにより成形。底部は高台状に粘土紐を貼り付け、上げ底とする。	ナデにより成形。	良好	粗。1.0 ～ 3.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
51	B	Ⅳ	-	底部	ナデ。底部にもナデを施し、外縁が高台状になる。	ナデ。	不良	密。1.0㎜未満の石英・長石・赤色粒を密に含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
52	B	Ⅳ	-	頸部	頸部の屈曲部に貝殻による押引き文が施される。調整については不明。	貝殻による条痕が残る。	良好	密。	
53	B	Ⅲ	浅鉢	肩部	ミガキ。	ミガキののちユビオサエ。	良好	密。0.1㎜程度の砂粒を密に含む。	外面：橙褐色 内面：橙褐色
54	B	Ⅲ	浅鉢	肩部～胴部	摩耗により詳細不明。表面に煤が付着。	ミガキ。肩部内面は横方向のナデ。	良好	密。0.1㎜程度の砂粒を密に含む。	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色
55	B	Ⅲ	深鉢	口縁部	摩耗のため詳細不明。外面に突帯を貼り付け。	摩耗のため詳細不明。	あまい	粗。1.0㎜未満の長石・石英・黒色・赤色粒を密に含む。	外面：黒褐色 内面：暗橙褐色
56	B	Ⅲ	浅鉢	口縁部	ミガキ。口縁部にリボン状の突起を有する。	ミガキ。	良好	密。0.1㎜程度の砂粒を密に含む。	外面：赤褐色 内面：暗赤褐色
57	B	Ⅲ	浅鉢	口縁部	ミガキ。口縁部にリボン状の突起を有する。	ミガキ。一部、外面ミガキの際のユビオサエが残る。	良好	密。1.0㎜未満の赤色粒をまばらに含む。	外面：赤褐色 内面：暗赤褐色
58	B	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁部に横方向のナデ。突帯の貼り付けにより、口縁部文様帯とする。無文。	摩耗により詳細不明。	あまい	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の石英・長石粒を多く含む。	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色
59	B	Ⅳ	鉢	口縁部～胴部	口縁部に１条の突帯を貼り付ける。口縁端部は丸くおさめる。調整は不明。	摩耗により詳細不明。	不良	粗。1.0㎜～ 2.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：橙色 内面：明赤褐色
60	B	Ⅲ	-	底部	摩耗により詳細不明。底部外縁をナデにより成形し、ゆるい上げ底状を呈する。	摩耗により詳細不明。	不良	密。0.5㎜程度の長石粒を密に含む。1.0㎜程度の石英粒をまばらに含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
61	B	Ⅱ	-	底部	摩耗により詳細不明。	摩耗により詳細不明。	不良	密。0.5㎜程度の長石粒を密に含む。1.0㎜程度の石英粒をまばらに含む。	外面：赤褐色 内面：暗褐色
62	B	Ⅲ	-	底部	摩耗により詳細不明。円盤状の底部に粘土を巻き上げ、底部とする。底部外面はナデにより上げ底状を呈する。	摩耗により詳細不明。ナデを基本とする。	不良	粗。1.0 ～ 3.0㎜程度の長石・石英粒を多く含む。	外面：橙褐色 内面：暗褐色
63	B	Ⅲ	-	底部	横方向のナデ。底部はナデにより成形し、上げ底状を呈する。	摩耗により詳細不明。	不良	粗。1.0 ～ 2.0㎜程度の長石・石英・赤色粒を多く含む。	外面：橙褐色 内面：暗灰褐色
71	C	Ⅳ	鉢形	口縁部～頸部	口縁部文様帯は、２条の凹線を施す。凹線間がやや突出する。ミガキによる調整。	ミガキ。	良好	密。1.0㎜程度の黒雲母を多く含む。1.0㎜未満の長石粒を密に含む。	外面：暗赤褐色 内面：にぶい褐色
72	C	Ⅹ	浅鉢	口縁部	外面に２条の沈線を施し、口縁部はやや外反する。	一部ミガキが残るが、摩耗により詳細不明。	不良	密。1.0 ～ 2.0㎜程度の黒雲母をやや多く含む。1.0㎜未満の長石、石英粒を密に含む。	外面：褐色 内面：褐色
73	C	Ⅹ	浅鉢	口縁部	ミガキによる調整。黒川式。	摩耗により詳細不明。	良好	密。1.0㎜未満の長石粒をわずかに含む。	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色
74	C	Ⅳ	-	口縁部	横方向のナデ。端部はやや尖り、面をなす。	横方向のナデ。	良好	密。1.0㎜程度の長石・赤色粒を密に含む。	外面：橙色 内面：橙色
75	C	Ⅳ	-	口縁部	斜め方向のナデ。口唇部がやや肥厚する。	摩耗により詳細不明。	良好	密。1.0㎜程度の長石・赤色粒をまばらに含む。	外面：明褐色 内面：明褐色
76	C	Ⅳ	-	口縁部	直口縁で、やや外反する。	摩耗により詳細不明。	良好	密。1.0㎜未満の長石・石英粒を多く含む。	外面：明褐色 内面：明褐色
77	C	Ⅳ	鉢形	底部	摩耗により詳細不明。	ナデ。	不良	密。1.0㎜未満の長石粒をまばらに含む。	外面：暗赤褐色 内面：黒褐色
78	C	Ⅳ	-	底部	底部はやや上げ底を呈し、外面はナデにより成形。	摩耗により詳細不明。	不良	粗。1.0㎜未満の長石・赤色粒を多く含む。	外面：にぶい橙色 内面：橙色

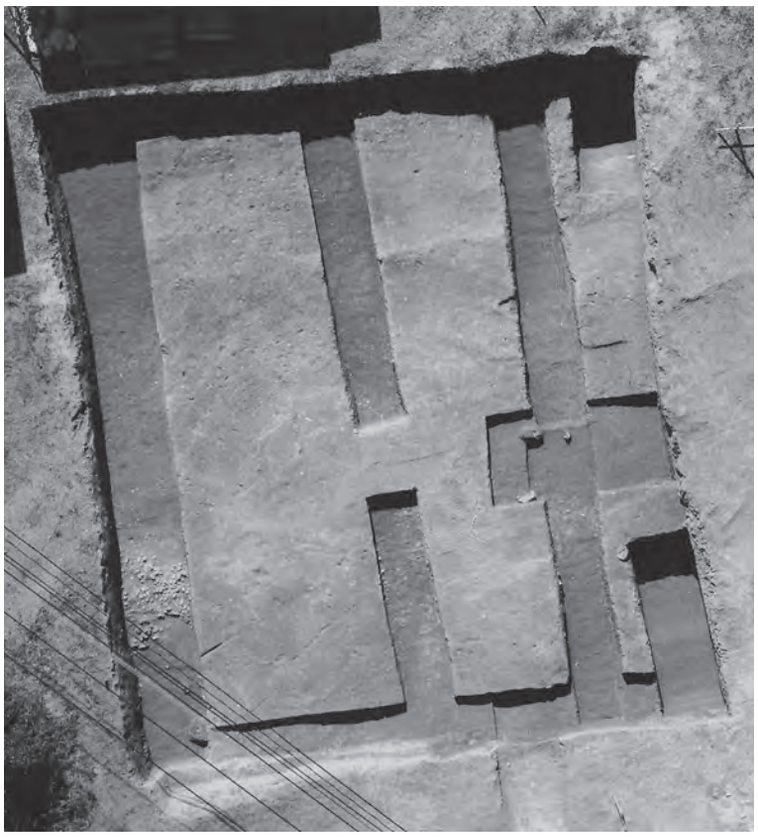
第３表　石器観察表

掲載№	器種	出土位置／出土層位	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量（g）
1	敲石	確認（工事用道路部）／Ⅵ層相当	砂岩	8.8	9.2	3.3	427.0
2	石錘	確認（B 区）／Ⅳ層相当	砂岩	7.7	5.7	1.4	103.2
64	石鏃	B 区／Ⅵ層	チャート	1.8	1.8	0.5	
65	打製石斧	B 区／Ⅵ層	砂岩	11.9	6.7	1.5	151.4
66	打製石斧	B 区／Ⅷ層	ホルンフェルス	7.6	6.7	1.3	53.7
67	横刃状石器	B 区／Ⅵ層	砂岩	8.1	5.0	1.5	81.6
68	石錘	B 区／Ⅶ層	砂岩	8.6	6.1	1.4	134.8
69	石錘	B 区／Ⅵ層	ホルンフェルス	3.5	5.4	0.7	13.0
70	石錘	B 区／Ⅵ層	ホルンフェルス	6.2	6.2	0.9	48.1

分蔵遺跡遠景（東から）

分蔵遺跡調査区俯瞰

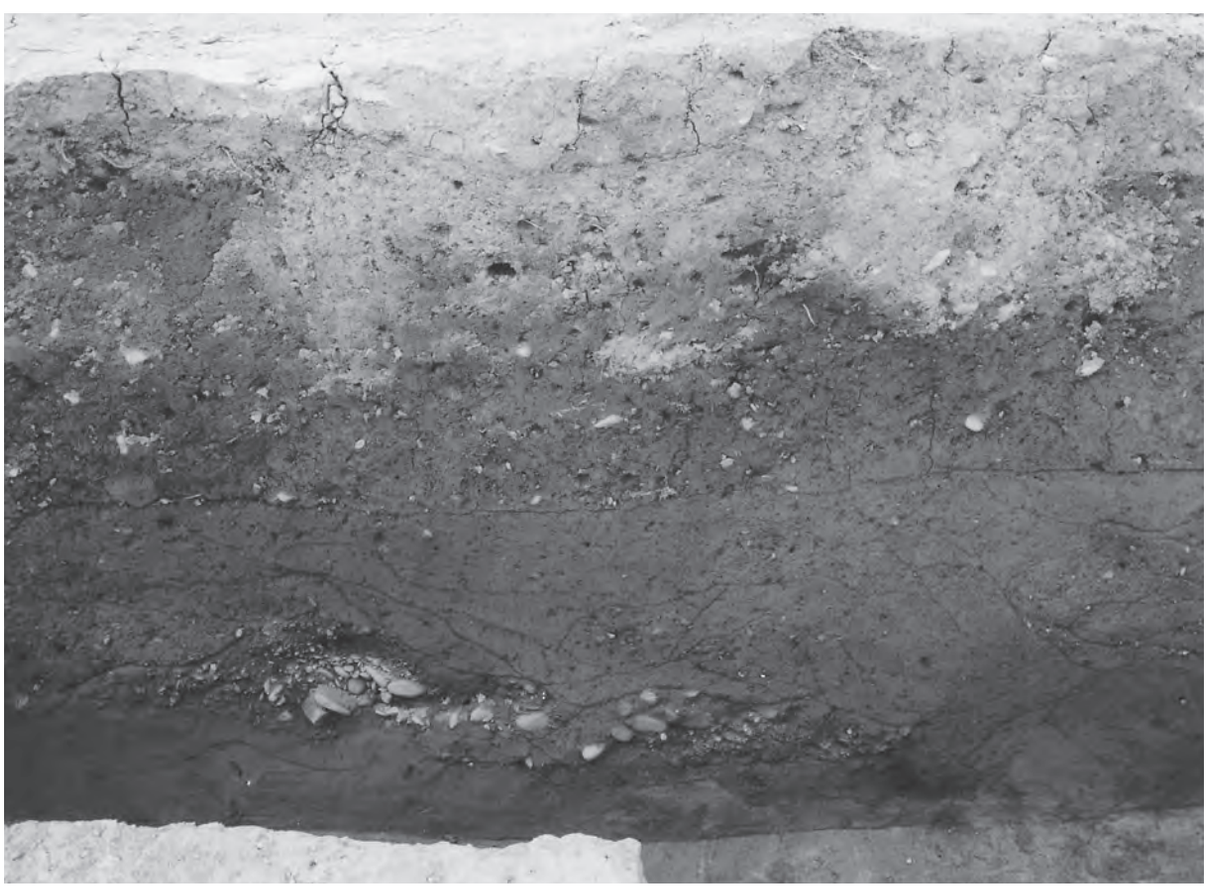
図版　2



B区俯瞰

B区東壁土層断面

C区俯瞰

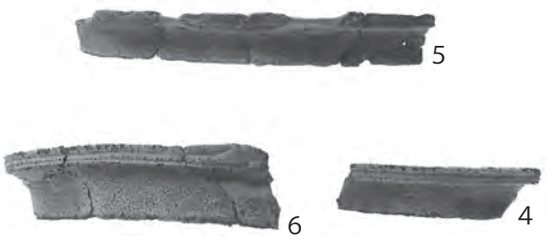


C区西壁土層断面

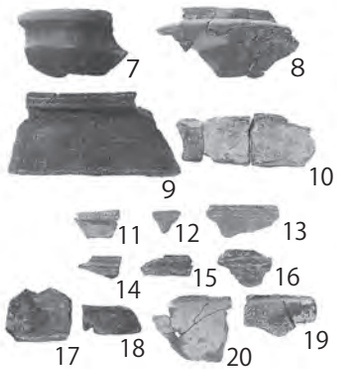
図版　4

Ⅵ層出土深鉢形土器

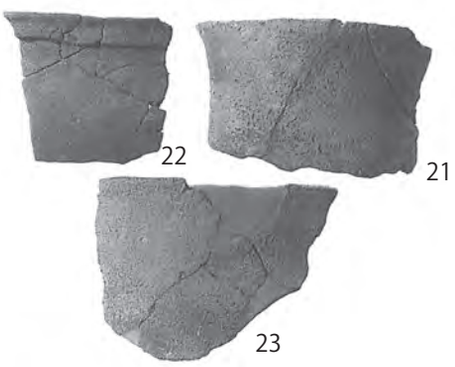
深鉢形土器内面



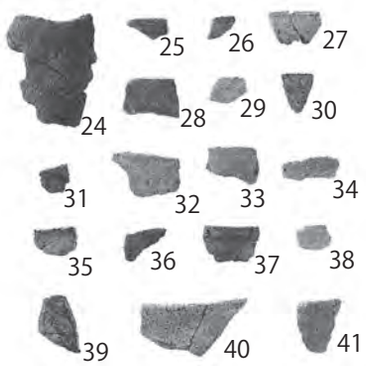
Ⅵ層出土浅鉢形土器



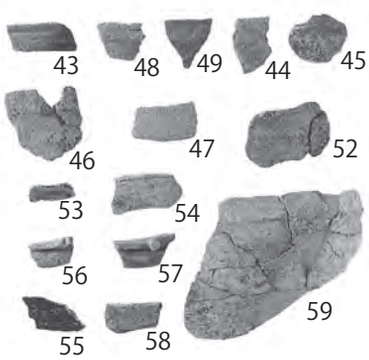
Ⅵ層出土土器



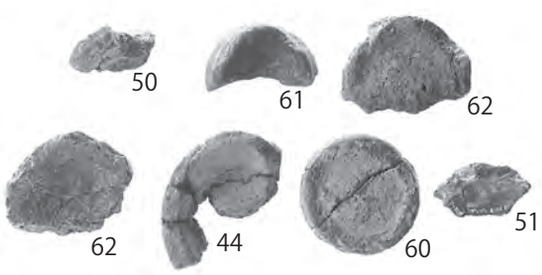
Ⅵ層出土土器



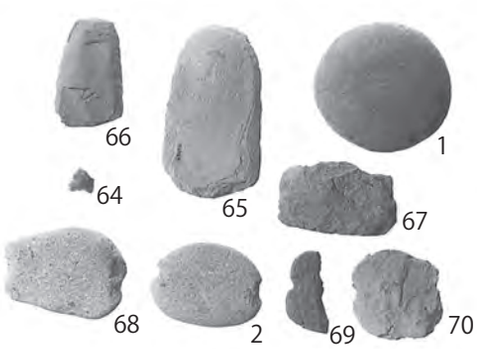
Ⅵ層出土土器



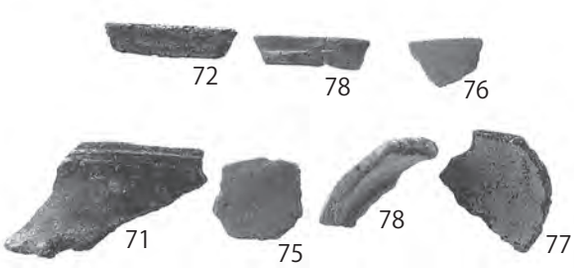
Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層出土土器



B区出土底部



出土石器



C区出土土器

報告書抄録

ふりがな	ぶんぞういせき
書　　名	分蔵遺跡
副 書 名	東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 139 集
執筆・編集 担当者名	渕ノ上隆介
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
発 行 年 月 日	2006 年 11 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ぶんぞういせき 分蔵遺跡	みやざきけん 宮崎県 ひがしうすきぐん 東臼杵郡 かどがわちょう 門川町 おおあざかどがわおすえ 大字門川尾末 あざぶんぞう 字分蔵	45421	1024	32° 28′ 14″	131° 30′ 9″	2005. 9.29 ～ 2005.11. 4	534㎡	東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う発掘調査

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
遺物包含層	縄文時代後期 縄文時代晩期	なし	天城式土器（深鉢・浅鉢）、石錘、打製石斧、石鏃 黒川式土器、無刻目突帯文土器、石錘、打製石斧、横刃状石器

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 139 集

分 蔵 遺 跡

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2006 年 11 月 30 日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171　FAX 0985(72)0660

印　刷　合資会社　愛 文 社 印 刷
〒 880-0852　宮崎県宮崎市高洲町 222 番地
TEL 0985(28)8111　FAX 0985(24)3856